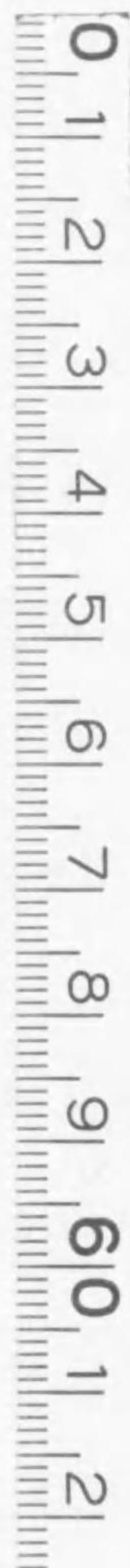


396-299



1200601311607



始



396

299



I種

W



1200601311607

序



近藤の——近藤と筆者との交誼はあまりに永く親しき間柄である。他人の前だからとて今更近藤君とも近藤氏とも云ひ悪い。無理に云へば却つて空空しくなり折角くわかく泛うかべた近藤及近藤の仕事に對する敬愛の情が散つて仕舞ふ怖れがある。故にいつも通り近藤と云はせて貰はふ——東海道に於けるや因縁淺からざるものがある。美術學校在學時代卒業製作に東海道五十三驛を暇に飽かして油繪に仕立てた。その當時われ等同級生達は一つの山一つの木の形を纏める事にすら骨が折れた。然るに近藤は五十三驛の一々を眼前の印象のみならず、驛路の情趣、旅てふもの、あはれさ面白さまで含めてその強い筆の上に塗抹し出した。この時、既に大家の風を存した。一同呆然たる許りであつ

序

た。以來東海道五十三次といへば直ぐに近藤の綽名になる位であつた。

近藤は實に旅が好きである。十日も遇はないで居るとその間に何處其處と氣輕るな旅をして來てゐる。近藤と一しよに道中して沿道の風物に對し近藤は氣せはしなくてよく觀ないようだと思ひ後で尋ねると一々詳しく知つてゐる。彼は觀ないのでない。大概の旅の風物は暗んじて仕舞つて彼の興味を牽かないのだ。われ／＼が好奇心を起す時既に彼はそのものに對して通常茶飯にしか感じられないらしい。所謂旅通なる一人である。そして東海道筋は特に愛し旅の出しな歸しなには随分度々寄つて研究して來るようだ。最近はず年われ等東京漫畫會の一行の五十三次自動車旅行には先達として指揮を仰いだ一人である。

旅通であり、東海道通であり、彼自身、昔は奇

行家であつた彼の描く膝栗毛の漫畫であるから、それが活躍し、興味送り、急所を穿つ、事は言ふだけが野暮であらう。

浩一路として彼が美術院の新進である事は世上須知の事實である。彼は愈彼の鋭い自然の觀察眼を院展の邦畫の上に閃かしその方面に彼の生命を確立して行く事と期待されてゐる。さすればこの種の印刷物の漫畫は彼の手から産まれるのも追々稀れになる事と思ふ。この意味に於ても本書は珍品であらう。

此の書は十返舎一九の作にかゝる東海道中膝栗毛の文章中より彼の畫となるべき所を拔萃し、東海道中の氣分を漫畫の上に發揮したものである。要するに一九の膝栗毛を材料とし浩一路の道中漫畫觀を遺憾なく語つたものである。

近藤は今渡佛中、先頃、長崎と香港とより便り

序

四

を得た。その留守中本書が出版される機運となつたので夫人から囑され予が装釘と序文を敢てする事になつた。

渡佛の旅も彼に取つては東海道中の延長であらう。

大正十一年三月

一平生

漫畫東海道中膝栗毛 目次

出立	一
柳が白	三
房州の鼻	五
ござった鯨	七
旅雀の餌鳥	九
ロハの酒	一一
火のついた團子	一三
駕かきを、かつぐ彌次郎兵衛	一五
謎々	一七
五右衛門風呂	一九
籤にらめ	二二
泥龜と飯盛と護摩の灰	二三
吞まず食はずで原の宿	二五
蕎麥一杯で心が浮島ヶ原	二七
二五の三文菓子	二九

目次

一

北八佛壇の中へ轉け落つ……………三二
 名物蠔螺の豪焼……………三三
 鎌の團子……………三五
 馬上の空駟……………三七
 人の悪い川越人足……………三九
 名物とろ汁……………四一
 川支へ……………四三
 薬罐頭をへこみます……………四五
 俄か侍……………四七
 北八駕の底を抜く……………四九
 暗闇の恥を明るみへ……………五一
 盲人と侮りし報い……………五三
 法螺の吹き損じ……………五五
 馬子に一本やられる……………五七
 襦袢の幽霊……………五九
 船中の蛇遣ひ……………六一
 不思議の草鞋……………六三

拾つた四文錢一本……………六五
 坊主持……………六七
 静御前が持病の疝氣……………六九
 彌次さん狐に化かされる(其一)……………七一
 同……………七三
 (其二)……………七三
 箆棒に馬の糞……………七五
 女郎買のからしり馬……………七七
 三文の智慧……………七九
 將棋きらがひ……………八一
 按摩の仕返し……………八三
 餓鬼道の一里塚……………八五
 醉拂ふ足……………八七
 馬の低當……………八九
 豪氣に運の悪い男……………九一
 南瓜の胡麻汁……………九三
 石を食ふ……………九五
 押の強い先生……………九七

目次

化の皮……………一九

無筆の犬……………一〇一

歩く家……………一〇三

臆病者の道連れ……………一〇五

正體見たり枯尾花……………一〇七

自慢の國太夫節……………一〇九

伊勢の髪結……………一一一

籤井竹庵……………一一三

どつちも安産……………一一五

大佛の柱……………一二七

京の喧嘩……………一二九

百萬遍……………一三三

大根小便しよく……………一三三

都女郎……………一三五

酒と茶……………一三七

大根の盲録……………一三九

二軒茶屋……………一三一

女商人……………一三三

じやうもんが行く……………一三五

梯子の手紙……………一三七

邊栗屋與太九郎訪問……………一三九

馬の横腹……………一四一

按摩の大當り……………一四三

夢中作左衛門……………一四五

葉子の源四郎……………一四七

二軒前の雪陣(其一)……………一四九

同(其二)……………一五一

窟 籤(其一)……………一五三

同(其二)……………一五五

坤はこんく狐福……………一五七

佐平次の目算……………一五九

損料の小文字……………一六一

下に女の着物……………一六三

常の大外れ……………一六五

目次

素寒貧の蘇生……………一六七

肥取の親仁……………一六九

河太郎大盡……………一七一

三文字屋……………一七三

お妾様……………一七五

目次終

漫畫東海道中膝栗毛

十返舎一九作

近藤浩一路畫

出立【日本橋】

これは、神田の八丁堀邊に、獨住の彌次郎兵衛といふのうらく者、食客の北八諸共、朽木草鞋の足もと軽く、蛤のむきみ絞に對の浴衣を吹きおくる、神風や伊勢參宮より、足引の大和めぐりして花の都に梅の浪花へと、心ざして出行くほどに、はやくも高繩の町へ來かゝり、川柳點の前句集を思出せば、

高輪へ來て忘れたることばかり

とよみたれ共、我々は何一つ心掛りの事もなく、獨身の氣散じは、鼠の居賃出すも費と、身上のこ

出立

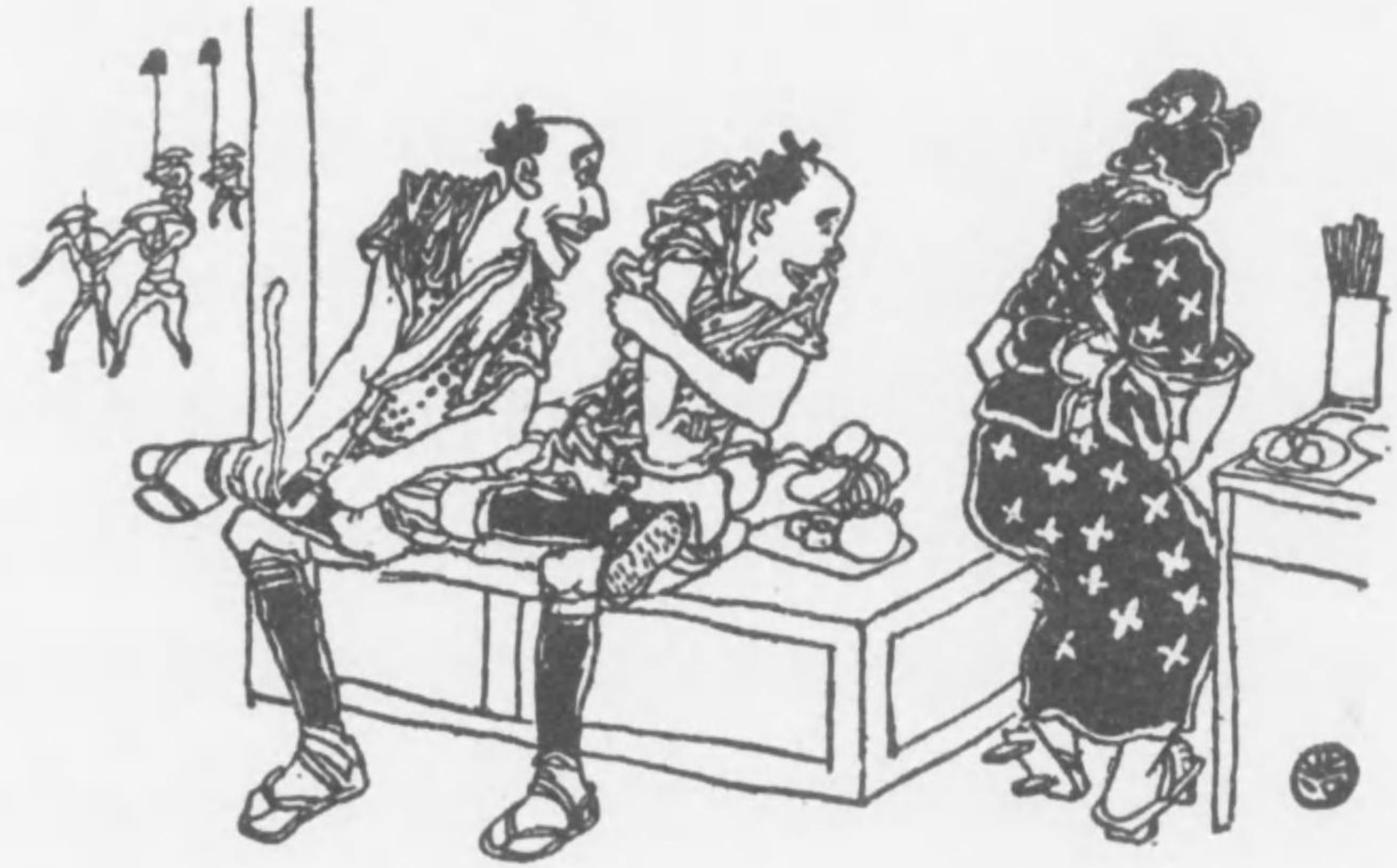
らず風呂敷包となりたるも心安し、去りながら、
 旦那寺の佛餉袋を和かにつめたれば、外に百銅
 自腹を切つて、往來の切手を貰ひ、大屋へ古借を
 済ましたかはり、御關所の手形を受取り、ふめる
 物は見倒屋へ授けて金に替へ、がらくた物は店請
 にしよはせて禮を受け、漬菜のおもしと、炭搔庵
 丁は隣へ残し、ちぎれたれども、繩簾と油壺は、
 向うへ譲りて何一つ、取残したる物も無く、まだ
 も心掛りは、酒屋と米屋の拂ひもせず、だしぬけ
 にしたれば嘸や怨みん、氣の毒乍ら、これも古き
 うたに、

さきの世にかりたをなすか今かすかいつれ
 むくいのあると思へば



柳が曰 【品川】

ほどなく品川へつく、彌次郎兵衛、海邊をばなど
しな川といふやらん、と難じたる上の句に、北八
取敢ず、さればさみづのあるにまかせて、いと面
白く歩むともなしに鈴ヶ森に至り、(中略)それよ
り六郷の渡をこえて、萬年屋にて支度せんと、腰
をかける、萬年屋の女「お早うございます」彌次「二
膳頼みます」北八「コウ見なせえ、今の女の尻は、
去年までは柳でゐたつけが、もう白になつたア。」
(中略)彌次「コウ無駄を云はずと早く食はッし、
汁が冷めらア」北八「オヤ何時の間持ッて来た、
どれどれ」とならちやをあり切、さらさらとやり
彌次「もうお鉢が零落した」北八「又先へ行つてう
めえ物をしてやらう」とここを立出で、行くに向
うよりお大名の行列、先拂「したアにく、被物と
りませうぞ、馬子、馬の口を取りませうぞ、後の



柳が白

人脊が高いぞ「彌次」おいらがことか、高い筈だ。
愛宕の坂で八紋龍と肩をならべた男だ「北八」洒落
なसानんな、飛んだ目に逢はうぜ。」

房州の噂 【川崎】

彌次郎も北八も此處より馬に乗ると、二匹ならべて引き出す、鈴の音しやん／＼、馬ヒイン／＼、
(中略)北八を乗せたる馬方、大道に放尿ながら、
「先度の晩けにな、アノ房州奴が喚アがな、我が親方の背戸口に、尿を放いてゐるたと思へ、あにがシヤア／＼といふ音を聞くと、我も氣が悪くなつたもんだつて、這奴なアかまふこたアねえ、打占めてやらうと思つて、打飲つた元氣で、いきなり腕よヲ捻上げて、其處へ打倒してと思へ、さうすると喚奴が膽ヲ潰しやアがつて、コリヤ何をする」と吐かしやあつたから、エ何よヲするも、犬の糞もいるもんかい、擲つて占めるのだ、黙つてけつかれと言ふと、何がああ體格だから、ひどい力のある女よ、この野郎みやアと、俺を突倒しやがったんで、エ、どうしやあがると、横面ア一つ打毆

つたと思へ、まだ小言を吐かしやアがるから我が親方の子に遣らうと思つて、餅よヲ買つて來かけたから、その餅よヲ二ツ三ツ、噉奴が口へ捻ぢ込んだら、むしやむしやと喰らやアがつた。さうすると最ツと呉れろと言やがツたんで我もそこらあ探し廻して、馬の糞たア知らずに、彼女が口へ押込んだら、胸よヲ悪がつて、腹ア立ちやあがるまいか、我も餘り可哀想だんて、たうとう焼杉の下駄ア一ツ、おつたふれたはな忌々しい」此話に二人も大に興を湧かし、早かな川の坊端につく。



ござった鯨 【かな川】

爰は片側に茶店軒を並べ、いつも座敷二階造、欄干付の廊下棧など渡して、浪打際の景色至つてよし、茶屋の女門に立つて、「お休みなさいやアせ、暖かな冷飯もございやあす、煮立の肴の冷めたのもございやあす、蕎麥の太いのをあがりやアせ、饅頭の大きなのもございやアす、お休みなさいやアせ」二人は爰にて一杯氣をつけんと、茶屋へ入り乍ら彌次「北八見さッし美しい大へんもんだ」北八「ハ、ア如何様い、娘だ、時に何がある」と北八そこらを見廻し、肴を指圖して、酒を吩咐ける、娘前垂で手をふきく、鹽焼の鯨を温め、銚子盃をもち出で、娘「これはお待遠さまでございしました」彌次「おまへの焼いた鯨なら旨からう」と娘「フ、ンと笑ひ乍ら表の方を向いて呼び乍ら行く娘」お休みなさいやアせ、奥が廣うございやす」



ござつた鱧

北八「奥が廣い筈だ、安房上總までついてゐる」
 彌次「北八見さッし、此肴ちとござつた目元だ」
 ち返して見て彌次郎兵衛、

ござつたと見ゆる目元のお肴は

さては娘が焼きくさつたか

北八之れを聞いて同じくこじつける。

うまさうに見ゆる娘に油断すな

きやつが焼いたるあぢの悪さに

旅雀の餌鳥 【程ヶ谷】

兩側より旅雀の餌鳥に出して置く留女の顔は、宛ら面を被りたる如く、眞白に塗立て、何れも非の字耕の紺の前垂を被めたるは、扱こそ古、爰は帷子の宿といひたる所となん聞えし、旅人を乗せたる馬士、怠けたる聲にて、唄 富士の人穴馬でも這入る、なぜに小山にや穴がない、ドウドウ、とめ女「馬士どんお泊りかな」馬士「いや旦那は武藏屋だが、お前の顔見たらソレ此畜生めが泊りたがらア、ソレく「馬」ヒ、ヒンく」と行過ぎると又後より旅人二三人 とめ女「もしお泊りかい」と引提へて引張る旅人「アレ手がもけらア」とめ女「手がもけてもようございませす、お泊りなさいませ」旅人「馬鹿云へ手がなくツちやお飯が食はれねえ」とめ女「お飯の食られねえ方が、お泊め申しちやア猶勝手さ」旅人「エ、忌々しい、放さぬか」とや

うやう振りきッて行くと又後より来る旅僧、とめ女「お泊りかい」旅僧此女の顔を見て、「いやもちつと先へ参らう」と此跡より来るは田舎道者、とめ女「お泊りなさいませ」田舎「旅籠さあ安かあ泊りますべえ」とめ女「お旅籠は二百ヅ、田舎」イヤイヤさうは出し申さない、そん代湯は微温くてもよくござる、平はついぞ替へて食ッたことはござらないが、飯と汁は、たツた六七杯づ、も喰やア、それでよくござる、旅籠は百十六文づ、も出し申さう」とめ女「そんなら外へお泊なさいませさ」田舎「ハア泊めざあ往きますべえ」と行過ぎる。此の體を見て、彌次又こぢつける、

おとまりはよい程ヶ谷ととめ女

戸塚前では、なさいりけり。



ロハの酒 【戸塚】

(これより兩人親子の如く見せかく) 戸塚の宿にて北八が湯へ行き居る間、亭主出で来る、「是れは何もござりませぬが、一ツ召上がりませ 彌次「いや御亭主さん、これでは迷惑だ、亭主「イエ、時に斯様で御座ります、私方は今迄、外商賣を致してをりましたが、今度旅籠屋になりました、即ち今日が店開でございます、あなた方は始めてのお客ゆゑ、それで祝つて一獻差上げますのでございませぬ、別に御酒代を戴くのではござりませぬ、お心置なく召上ツてくださいませ、今に吸物も出 來ます」彌次「イヤ夫は先御目出度、しかし御馳走になつては近頃氣の毒だ」亭主「ナニサ御遠慮なくハイ御ゆるりと」と、言葉で、立つて行く、北八風呂より出で、北八「様子は残らず彼處にて聞いた親方たゞとは有難え」彌次「これ洒落すと、もう一

暹湯へ這入つて來や、其内に皆俺が呑んでしまはア「北八」さうだらうと思つて、湯へ這入つてゐても洗ふ空アねえ、オヤまだ足は土だらけだ、ま、よサア始めねえ」彌次「もうとツくに始めてゐらあ、ドウもう一ツ始め直してから差さう」北八「いや俺はこれだ」と茶碗に注いで、息なしはぐツ／＼とやらかし北八「あ、いい酒だ、時に肴は、ハ、ア蒲鉾も白板だ、餃ちやアあんめえ、コウ父さん、此紫蘇の實がいツち旨え、お前は是計り食ひなせえ」彌次「馬鹿アいへ、そりやア跡へ残るに極つたもんだ、時にもう吸物が出さうなもんだ。」



火のついた團子 【藤澤】

先づ棒端のあやしけなる茶屋に休み北「婆さん團子は冷てへか、チト暖めてくんな」茶屋の婆「ドレ焼き直して進ぜますべい」と消炭の火を掻きさがし、灰のたつをも構はず煽ぎ立てる（中略）やがて主の婆、團子を四五串盆にのせて持つて出る、彌次「こいつは黒い團子だ」と言ひながら一串とり上げて見れば、消炭の火が團子に附着いてゐるゆる態と火の付いてゐるを隠して、北八の方へ差出して彌次「コレ手前、焦けた奴がよからう」北八「ドレぐ」と口元へあてがひ「ア、ツ、婆さんアツ、飛んだ目に合はせた、コレ團子に火がくつ付いて、ア、ぴり／＼する」彌次「ハ、手前暖なのがよからうと思つて、火の付いてゐたのをやツたは」北八「ア、忌々しい、ベツベツ」彌次「サアいかう、婆さんお世話」と茶代を置き、爰を出て

藤澤の宿へ這入ると、両側の茶屋口を揃へて、茶屋女「お休みなさいやアし、酔はない酒もござりやアす、ぱりくする強飯をあがりやアし。



駕かきを、かつぐ

彌次郎兵衛 【平塚】

駕かき「安いが行きますべい、ナア棒組、サア召
しませ」と駕の値が出来、彌次郎兵衛「こゝより駕
に乗って出かける先棒、棒組や旦那はかたいぜ」
後棒「しツかり構へてるさしやるもんだんて」と
此内茶屋の亭主駕かきの名を呼びながら亭主「オ
、イ、梅澤の佐渡屋へちよつくりさう云つてく
んさい、此中の新酒はあんまり水の交ぜやうが少
ない、今度から酒をちツと、交せてよこしてくん
さいと、云つてくんさいヨ、ソレ何か落ちたア」
駕「アイアイ」と擔ぎ出す、彌次「コウ貴様達ア藤
澤か、アノ宿も大分綺麗になつたの、問屋の太郎
左衛門どのは達者かの」先棒「よく旦那は知つてご
ざる、随分達者でられます」彌次「孫七殿はまだ
勤めてゐるかの」先棒「アイサア、旦那は何でも明



駕かきをかつぐ彌次郎兵衛

一六

るいもんだ」後棹、篋棒め、知ッてるやしやる筈だ
駕の内なかで道中記だうちうきを見て居ゐさつしやるはハ、ハ、ハ、
、」此内このうち早くも馬入ばいりの渡わたにつく。

謎々 【大磯】

春の日の長欠伸に、顔の掛金もはづる、計り、目を摺りながら、北八「ア、退屈した、ナント彌次さん、道々謎を懸けやう、お前解くか」彌次「よからう、懸けやれ」と謎の懸合解合が始まる。北八「俺二人が國所なあに……これを豚が二匹犬子が十四と解く」彌次「その心は」北八「ふた二ながらきやん十もの」彌次「俺のはちつと長いぜ、マアかうだ、俺二人が國所と懸けて、是を豚が二匹犬子が十四と解く、その心はふた二ながらきやん十もの、サアこれなアに」北八「ハ、そんな謎があるものか」彌次「笹棒め、ありやアこそ懸けるは、解いて見ろへ」北八「どうしてそれが知れるものだ」彌次「知れざあ云ツつてきかせやう、これを色男が自分の帶を取って、女にも帶を取らせると解く」北八「其心は」彌次「ハテ解いた上で又解かせるから、なんと

奇妙か、サア〜酒を買へ〜」北八「待ちなよ、
 意趣けえしをやらかさう俺がのもちつくり長い、
 マア搔摘んだ處がかうだ、俺二人が國所と懸けて
 是を豚二匹犬子十四と解く、其心はぶた二ながら
 きやん十もの、是を又色男が自分の帶を取ッて、
 女にも帶を解せると解く、又其心は解いた上で解
 かせるから、サア是ナアニ：：「彌次「ハ、ハ、途
 方もねえ長い謎だぞ」北八「どうだ彌次さん知れめ
 えがの、是れを衣桁のふんどしと解やす」彌次「其
 心はどうだ」北八「解いては懸け解いては懸け」二
 人「ハ、ハ、」



五右衛門風呂 【小田原】

彌次郎が隠しおいたる雪隠の下駄を見付けてハ、
讀めたと心に點頭、直に其下駄をはいて、底板の
ない、五衛右門風呂に這入北八「彌次さん〜」
彌次「何だ又呼か：：「成程手前の云ふ通り入染
めて見ると熱くはねえ、ア、い、心持だ、あはれ
なるかな石童丸はツンレン〜」其うちに北八は
流石に尻が熱く立ったり坐ったりいろ〜して、
餘り下駄にてぐわた〜と踏みちらし、つひに釜
の底を踏抜き、ベツたりと尻餅をつきければ、湯
は皆流れて、シウ〜〜〜北八「ヤアイ救船
〜」彌次「どうした〜、ハ、ハ、」宿の亭主此音
に驚き、裏口より湯殿に廻り膽を潰し亭主「これ
は又どうして底が抜けました」北八「つひ下駄でぐ
わた〜やつたからさ」と云ふと亭主は不思議さ
うに北八の足を見れば、下駄をはいてゐるゆゑ、

亭主「イヤアお前は、途方もないお人だ、据風呂へ這入るのに下駄をはいて這入るといふ事があるもので御座いますか、埒もないこんだ」北八「イヤ俺も、初手は跳足で這入つて見たが、餘り熱いからさ」亭主「いやはや苦々しいこんだ」と大きに腹を立てる。北八も氣の毒さ、こそくと體を拭いていろく言譯する。彌次郎氣の毒に思ひければ中へ這入り、釜の直し賃南鍬一斤遣はし、やうやうと訛言して、

据風呂の釜をぬきたる科ゆゑに

やどの亭主尻をよこした。



籤にらめ 【箱根】

湯本の宿といふは、兩側の家作華麗やかにして、
いづれの内にも容顔よき女二三人宛、店先に出て
名物の挽物細工を商ふ彌次「何ぞ買はう」女「お土
産お召しさいませ、お入りなさいやんせ」彌次「コ
ウ姐さん其處にあるものを見せなせえ」といふに
娘は、又外の客と相手になつて商してゐる、勝手
より婆走り出で、婆「ハイ／＼これでおんざりませ
か」婆では不承知の顔付にて、彌次「それぢやアね
え、コウ姐さん其方の方を見せなせえ」ハイ／＼これ
でおんざりませるか「彌次」エ、それでもねえ、コウ
姐さん、お前の手に持つてゐるは何だ「娘」ハイハ
イお貰入でござりやんす「彌次」コレ／＼この事さ
時にいくらだ「娘」ハイ三百でござりやんす「彌次」
百許りにしなせえ「娘」お前さんも餘りな、懸價は
まうしやせぬ」と彌次郎をジロリと見る、忽ちの



ろくなりて、彌次「そんなら二百よ」娘「もうちつとお召しなさつて下さいませ、オホ、」とねつから可笑くもないことを笑つて、彌次郎が顔を又ジロリと見る、彌次「面倒な四百〜」と一本投出して買取り「北八サア行かう」娘「よう、お出でなさいやんした」北八「ハ、ハ、ハ、三百の物を四百に買ふとはあほらしい〜」彌次「それでも惜しくねえ、アノ娘は餘程俺に気があつたと見え、初手から俺が顔許り見てゐるたは」北八「見てゐた筈だ、彼の娘の目を見たら籤にらめだ、ハ、ハ、ハ、」

泥龜と飯盛と護摩の灰

【三島】

助郷馬の鈴の音も絶果て、脊戸に啼く犬の遠吠、
猪を追ふ鳴子の音迄、吹送る夜嵐の身に染むば
かり、行燈の油も盡きて、何時の間にかは眞暗闇
此時、彼菴になし置きたる泥龜床の間に置きたる
儘、それなりに忘れたるが、やがて藁苞を食ひ破
り、そろ／＼這出で、ごたつき歩くに、十吉目を
覺し、何やらんと考へる内、彼の泥龜は北八が
衣着の中へ這ひ込むと、北八吃驚目を覺し北八「
だれだ／＼」と頭を上げると、泥龜うろたへて北
八が胸のあたりへ駈け上る、北八きやつといつて
引摺み、抛り投ると、彌次郎が顔へぱつたりこれ
もきやつと云つて目を覺まし、狼狽へて引摺み、
指先を喰ひ付かれて、「アイタ、」敵妓お竹も目
をさまし、「ヤレ打魂消た、あじやうしたへ」彌次「

火を點してくれろ、アイタ、」たけ「なんとしたへ」と搜り廻す手先が泥龜へ觸り、ペアチャバアと後へ倒れる拍子に、襖がはづれて共にばったり、北八無性に手を叩き、「眞暗でねツからわからぬ」たけ「お辰どんく、最前から客衆が腕を叩かつしやる、早く灯よヲ持つて來なさろ」彌次「早く早く早くアタ、、、」と無性に周章騒ぐ、此隙に十吉、彌次郎が布團の下に入れて置きし、打替の金を盗み兼て拵へ置きたると見えて、石塊を紙にくるくる包みたるを拵替へ、胴卷へ入れて又元の如く布團の下へ入置く、一體此十吉は道中の護摩の灰。



吞まず食はずで原の宿

【沼津】

沼津の茶屋より供を連れたる侍と道連になり、三鳥の宿にて護摩の灰に路用をしてやられ、難儀をしてゐる兩人、腰に下げたる印傳の巾着を三百文にて賣りつけしところ、その侍にねぎられて、とう／＼百文にて賣りとばし北八「モン是は安いもので御座ります、無駄つけながらも何歳で御座ります」侍「身共忝共が兩人罷在るが、是が總領への好土産ちやて」北八「へい貴方はまだお若うお見えなさいますにお子達がお二人とは、よいお楽しみで御座ります、無駄ながらも何歳で御座ります」侍「當て、見やれ」北八「ハイ貴方はコウト三十七八にもおなりなされますか」侍「身共當年巳の年で四十五歳にまかりなる」北八「それはお若うござります」侍「それに又家中うちの、若い女子供など

吞まず食はずで原の宿



吞まず食はずで原の宿

二六

が身共が事を澤村宗十郎に似てるなぞと申す」北八「ハ、成程」侍「時にお手前はいくつぢや」北八「旦那お當てなされて御覽じませ」侍「ムウ御手前歳な、こうと、二十七八にもなりをるか」北八「イエ丁度で御座ります」侍「ナニ丁度、アノ百か」北八「イヤこれで御座ります」と指を三本出す、侍「ハア三百には若い男だ」皆々「アハ、ハ、ハ、」此話に紛れてほどなく原の宿へ着く、

まだ飯も食はず沼津をうち過て

ひもじき原の宿に着たり

蕎麥一杯で心が浮島ヶ原

【原】

北八「エ、まだお前、其様なしみつたれを云ふは今の錢で蕎麥でも食うべい」彌次「そりやよからう〜」と蕎麥屋へ這入り、北八「オイ二膳たのみます」そばや「ハイ〜」とやがて蕎麥二膳出す、彌次「太い蕎麥だ食でがあつて宜いわへ、北八もう一杯かへやうか」北八「いや〜さう一時に錢を遣つてはならぬ、又先へ行つて何ぞやらかしやせうから、湯でもおもいれ呑みなせへ」彌次「そんなら若衆、湯を一つくんな、そばや「ハイ〜」彌次「ア、美味へ、北八呑まねへか、オイオイ、もう一杯くんな、オット、アツ、口を火傷した、餘り熱い、どうぞ蕎麥をちつとうめて貰てへもんだ」北八「コレ〜若衆、度々氣の毒だが、藥を飲むから一ツくんな」そばや「ハイ〜」彌次「コレた



蕎麥一杯で心が浮島ヶ原

二八

ツぶりだよ、オットよし、然し俺が呑む薬は醤油
の這入った湯でなければ利かねへから、とても
事に若衆、醤油を少し差してくんな、オットよし
く」と鮎の水を呑むやうに、グツくと呑んだ
彌次「さあ行かう、大分心が確に成つた」

今くひしそばはふじほど山盛りに

すこし心もうきしまが原

斯くて吉原の驛につく(原より三里六町)

二五の三文菓子 【吉原】

棒鼻の茶屋女共「お休みなさいやアせ、酒ウおあがりやアし、お休みなさいやアし」駕昇「駕籠よしかな駕籠」馬方「ナイ旦那衆、馬アどうだ、戻りだから安い」彌次「今まで乗詰めに乗って来たから、ちつと是から歩きやせう」北八「轉びやせうが聞いて呆れらア」夫より宿を外れて、松原の程に來か、れば十四五の前髪、土手を崩して藥罐をかけ菓子など並べて、旅人を呼び立つる、「お休みなさいませく」北八「彌次さん菓子でも食はねへか」彌次「ちと休まう」と土手の薄縁の上へ腰をかけ、二人ながら菓子をやりやり北八「此の菓子はいくらづ、だ」小僧「アイ一文づ、」彌次「五つ喰つたからいくらだ」小僧「わしはいくらだか知りません」北八「そんならこうと、五ツで二五の三文か、これ此處へ置くぞ」彌次「ヒヤアこいつは安いもんだ

もう一つ喰はう、コリヤいくらだ」小僧「ソリヤ三文「北八」どれく美味へく、小僧先の錢は濟んだぞ後の菓子を四ツ喰つたから三四の七文五分かエイは五分は負けろく」小僧「イヤ此衆は、モウ鹿劫記ちやア賣りましない、五文宛、六ツ呉れなさろ」北八「やアくやア錢があるかしらん」小僧「こへ出しなさろ、一ツ二ツ三ツ四ツ」と五文づつ一つづつに算へて、目の子算用にひつたくられ。

彌次「這奴は大笑ひだ」



北八佛壇の中へ轉げ落つ

【蒲原】

此宿の御木陣に、お大名のお著と見へ、勝手は今御膳の出る最中、其どさくさ紛れに北八飛び込みまんまと五六杯飯をしてやり、その上椀に盛りたる飯を一膳ちやつと手拭に打あけ、引包み、彌次郎へお土産として持ち歸れば彌次郎も大恐悦、かくて宿外れの木賃宿に泊る事になり、合宿の六部順禮の二人が因縁話を聞いて夜を更かしたままでは無事なりしが、これは又草木も眠る真夜中になつて、北八ひとり目を覺まし、實は大いに思惑あつて、時分はよしと起き上りたれど、灯はなし眞暗闇、其處ら邊りを搜り廻して、やうやうと梯子にとりつき、二階に上り見れば、天井は竹の簀子にて其上に席を敷きたれば、歩くとミシリ／＼と鳴るに驚き、やがて四ツ這になつて搜り廻るうち、宿



北八佛壇の中へ轉げ落つ

三二

の婆にさはッて「誰だ何をする」といふ聲に北八
 狼狽へさては門違せしかと逃出す拍子に竹篋子を
 踏み抜き、處もあらうに佛壇の中へ轉げ落つ、恐
 ろしい物音に目を覺ました爺 灯を點けて、佛壇
 の戸を開けば、北八が這ひ出す、爺「イヤ此の人は」
 北八「モシ身延様へはどう参ります」爺「馬鹿云は
 つしやい、何故此處へ這入らしやツた」北八「イヤ
 俺は小便に起きた處がつひ戸惑ひをして」爺「アニ
 戸惑ひをした、イヤ此人は佛様の中へ小便をしや
 せぬか」と大騒動。

名物蝾螺の壺焼

【山井】

木賃宿の大失策も、彌次郎兵衛の辯解に六部や順禮も共に口を添へてくれたるお蔭にて、やつと收まり、北八も浴衣一枚賣却なして、天井の繕ひ賃少々出し、さらりと済んでしまひければ、程なく夜が明けて、彌次郎北八早々にこの所を立出で、由比の宿に著くと、兩側より呼び立つる聲、茶屋女「お這入りなさいやアせ、名物砂糖餅よテ食いやアせ、鹽辛いのも御座いやアす、お休みなさいやアせ、お休みなさいやアせ」彌次「エ、やかましい女共だ」

呼び立つる女のこゑはかみそりや

さてこゝは髪由井の宿

夫より由井川を打越え、倉澤といへる建場へつく爰は蝾螺の名物にて、蟹人ども海より取來りて商ふ、爰にて暫らく足を休めて、

名物蝶蝶の壺焼

三

爰もとに賣るはさいえの壺焼や、

見どころ多き倉澤の宿

それより薩陀峠を打越え、辿り行くほどに俄かに
大雨降り出しければ、砂道に踏み込みし足も重け
にやうやく興津の驛に至る（由井より二里十八町）



糠の團子 【興津】

爰に怪氣なる茶屋に立寄り、北八「オイ婆さん、ソノ黄粉を付た團子を二三本くんないせい彌次」ヤレ〜久振りでお前の貌を見たは、何時も達者でお目出度、時に此子は、小さな時見たよりも大きくなつた、姉様は達者かの「婆」妾は子供はござんない「彌次」そんなら孫か「婆」インニヤ、子がなけりや孫もおさんない「彌次」ハテノ、お前の孫でなけやア、たしか何處かの孫であつた婆「インナ、馬子ぢやアおさんない、隣の駕籠屋の子でおさるは」彌次「ハアさうか、コウ彼の子、團子が二つ餘つたソレ喰いな」駕籠屋の子「ナニ糠をつけた團子はやアだ」ナンノ糠をつけたものか、コリヤ黄粉だ「婆」インネ、妾が處ぢや、糠ア付けて賣り申す」彌次「エ、道理でざら〜すると思つた、ベツベツ、そんなら犬にやらう、コ、コ、コ、」犬「ワンワン」

彌次「ソリヤやるは、あんといへ」犬「あア」彌次「ア、をしいもんだ」と残らず犬にやッてしまひ、胸を悪くして此處を立ち出で辿り行くに猶雨は頻りに降り續きて、一向洒落も冗言も出でばこそ、唯とぼくと歩み惱みて、程なく江尻の宿を打過ぎけるに、茲にて雨も霽れければ、

降りくらし富士の根ぶとをうちすぎて

江尻に雨の霽れあがりたり



馬上の空軒 【江尻】

雨止みたれば自ら行交ふ人の足も輕けに、輕尻馬の鈴の音も勇ましく、シヤン／＼／＼、北八「馬子どん、火を貸してくんなせへ」馬士「アイ／＼、御前方アお江戸だな、お江戸衆は氣が大い、昨日俺が府中から江尻まで三百で乗せた旦那がお江戸衆で好い旦那よ、長沼まで來ると其旦那の云ふにやア江尻まで三百ちや安いから、酒手を二百増してやらう、其代酒は別に此方から買つて吞ませるとて吉田の的場でたらふく酒を振舞はしやつた。その上、主やア草臥たらうから是から俺が下りて、主を此馬に乗せてやらうと言はつしやる、コリヤハア何たるこんだ、勿體にやあから俺ア厭アだと云つても是非俺に乗れとつて其代乗賃を二百やらうと、梅の木の立場からとう／＼俺をぼいのせて、江尻へ來たか、あんな好い旦那は滅多にやアない



馬上の空駢

三八

もんだア」と話の内、此馬に乗つてゐる旅人、馬の上にて空駢をかく「ゴウ〜〜」おい旦那危い目を覺しなさら旅人起されて目を開き「馬が埒が明かぬから眠氣が出た、昨日三島から乗つた馬は馬もよし馬子もとんだ氣のよい男よ、三島から沼津へ百五十で値をして乗つた處が、旦那は斯様早い馬に乗つて、氣の毒ながら駄賃は貰ひますまいといひをつた」など、先刻、馬士の言つたのを逆の色々と並べたて、早速返報をやれば、馬方歩き乍らゴウ〜〜。

人の悪い川越人足 【府中】

纏つて此この宿しやくをうち立ちけるが程ほどなく彌み勒りやくといへるに至いたる、爰こゝは名なに負おふ阿あ部べ川か餅もちの名物めいぶつにて兩側りゅうがはの茶店ちやんてん何れも綺麗きれいに華はなやかなり、茶店ちやんてん女によ名物餅めいぶつもちあがりやアし。五文もんどりをあがりやアし〜「彌み次じ」俺おれ等は昨宵けふべ、二朱しゆが餅もちを喰くつて來たから、モウ爰こゝでは喰くふめへ「北八きたはち」さう〜」と此この内安部川うちあべがわの川か越こ、道みちに出迎でむかひて、川越かはこし「旦那衆だんなしゆお上りかな」彌み次じ「オイ貴様きさま何だ」川越かはこし「川越かはこしに御座ござります安やすくやらずに、おたのん申まをします」北八きたはち「いくらだ」川越かはこし「昨日きのふの雨あめで水みづが高いから、一人ひとりまへ六十四文むそじゆぶん」北八きたはち「そいつは高い」川越かはこし「ハレ川かはをマアお見みなさい」とうちつれて河端かはたにへ出いで、彌み次じ「成程なるほど豪勢ごうせいな水勢すゐせいだ、コレ落かすめへよ」川越かはこし「あれお前まへ、サア其方そのちをつん向きむなさろ」と二人ふたりを肩車かたぐるまに乗のせて、川かはへさぶ〜と這入まひる、北八きたはち「ア、なんまいだ〜、目めが廻まはるや

うだ「川越」しつかり俺が頭へ取附きなさろ「彌次」
成程深いは、コレ落して下さるな「川越」アニ落す
もんかへ「彌次」それでもひよつと落したらどうす
る「川越」ハレ落した處が、たかでお前は流れて
しまはしやる分の事だ「彌次」エ、流れてたまるも
のかイヤもう来たぞく、ヤレく御苦勞く
と下りて賃錢をやり彌次「それ酒手が十六文宛」
川越は直に川上の浅い方を渡つて歸る、北八「あれ
彌次さん見ねへ、俺をば深い所を渡して六十四文
づ、ふんだくりやあがつた」



名物とろゝ汁 【鞠子】

彌次「もし御亭主、とろゝ汁はありませんか」亭主「ハイ出来ず」彌次「出来ねへか、しまった」亭主「コレ直に拵へずに、少時と待ちなさろ」と俄かに薯蕷の皮を剥かすして、さつさとおろしか、り、「コリヤ其處へお膳を二膳拵へろ、エ、それ前垂が引摺らア」女房「お前、箸の洗つたのウ知らずか」亭主「アニ俺が知るもんか、コリヤイ、その箸をよこせヤア」女房「これかい」亭主「エ、よこせといふ事よ」と挿木を取つてころくくと薯蕷をする、女房「それお前挿木が逆だ」亭主「かまうな、俺が事より汝がソリヤ、海苔が焦けらア、コリヤ挿鉢をつかまへてくれろ、エ、さう持つちやア摺れないは、おへないひやうたくれ奴だ」女房「アニ此方がひやうたくれだ」亭主「イヤ此の阿魔ア」と挿木で一ツくらはせると女房躍起となりて、女房「コノ野郎奴は」

と播鉢を取つて投げると、其處邊へとろ、がこぼれる。亭主「ヒヤア汝」と播木を振廻して立掛りしが、とろ、汁に迂つて眞逆に轉ぶ、女房「こんたに負けてゐるものか」と掴み掛りしが、是れもとろに迂りこける、向ふの上さんが駈來り「ヤレチヤア、又見たくでもない喧嘩かマア静まつしやろ」と兩方を宥めかゝり、是れも迂りころび、「コリヤハイ、何たる事だ」と三人全身中、とろ、だらけにスル／＼、彌次「こいつは始まらねえ、先きへ行かうか」と可笑さを堪へて爰を立出づ。



川支へ 【岡部】

それより宇津の山にさしかゝりたるに、雨は次第に篠を亂し、葛の細道心細くも、枝を力にや團子の茶屋近くなりて、彌次郎思はず坂路に迂り轉びたれば、

降りしきる雨やあられの十だんご

ころけて腰を宇津の山かな

岡部の宿の宿引待ちうけて、「お泊りで御座いますか」彌次「イヤ俺等ア今日川を越さにやアならねへ宿引」大井川は止まりました「北八」南無三、川が支へやしたか「宿引」左様で御座います、先きへお出でなさつても御大名が五かしら、島田と藤枝に御泊りで御座いますから、貴客方の御宿はござりませぬ、先づ岡部へお泊りなさいませ「彌次」そんなら、さうしやうか「北八」お前何屋だ「宿引」相良屋と申します、直にお供を致しませう」と打連れ



川支へ

四四

て急ぎ行く程に、早くも大寺河原の坂道を打越えて岡部の宿に至りければ、

豆腐なるをかべの宿につきてけり

あしに出来たる豆をつぶして

先づ此驛に宿を取りて、川の開く迄暫らく旅の勞をぞ休めける。

薬罐頭をへこます 【藤枝】

宿の入口にて、風呂敷包ちよいと肩に掛けたる田舎の爺、馬の跳ねたるに驚き、逃ける拍子に北八へ衝突ると、北八水溜の中へ轉けて、大きに熱くなり、北八「コノ爺奴眼が見えねへのか、寒鴉の黒焼でも喰らやアがれ」爺「コリヤハイ御免なさい」北八「御免なさいぢやア濟まねへぞ、コレ野郎は小粒でも、ぎやツといふから金の鯨を睨んで、産湯から水道の水を浴びた男だ」爺「インネハイ、水を浴びたならよく御座るが、其方の轉けた處は馬の小便の溜だもし」北八「小便の溜ツた所へ、何故ツツこかしやアがツたへ」爺「そりやハイ、俺もがらいやつた事だから、どうも詮方がない堪忍さッしやい」北八「何だ堪忍しろ、厭だわへ、奥の事ツたが、大江山の親分が鐵棒引いて交渉に来やうが石尊様が猪の熊の似面を描かせた提灯で、路次口

から溝板の上へ這ひかゝんで来ても、聞かねへと
言つちやア、久米の平内を居催促にやツたよりか
ア、まだびくともせぬ奴さまだア」爺「ソリヤハイ
何か六ヶ敷事を言はつしやるが、俺等にやアハイ
皆知れ申さぬ」彌次郎見兼ねてやう／＼に引分け
て、「北八もう了簡しろへ、爺さんお前が全體麁相
をしながら気が強い、もういゝから往きなせへ」
と北八を宥める内、爺面膨らしふせうぶせうに行
過ぎる。

頭につてきた八に今たゝかれし

薬罐頭の親爺へこんだ



俄か侍 【島田】

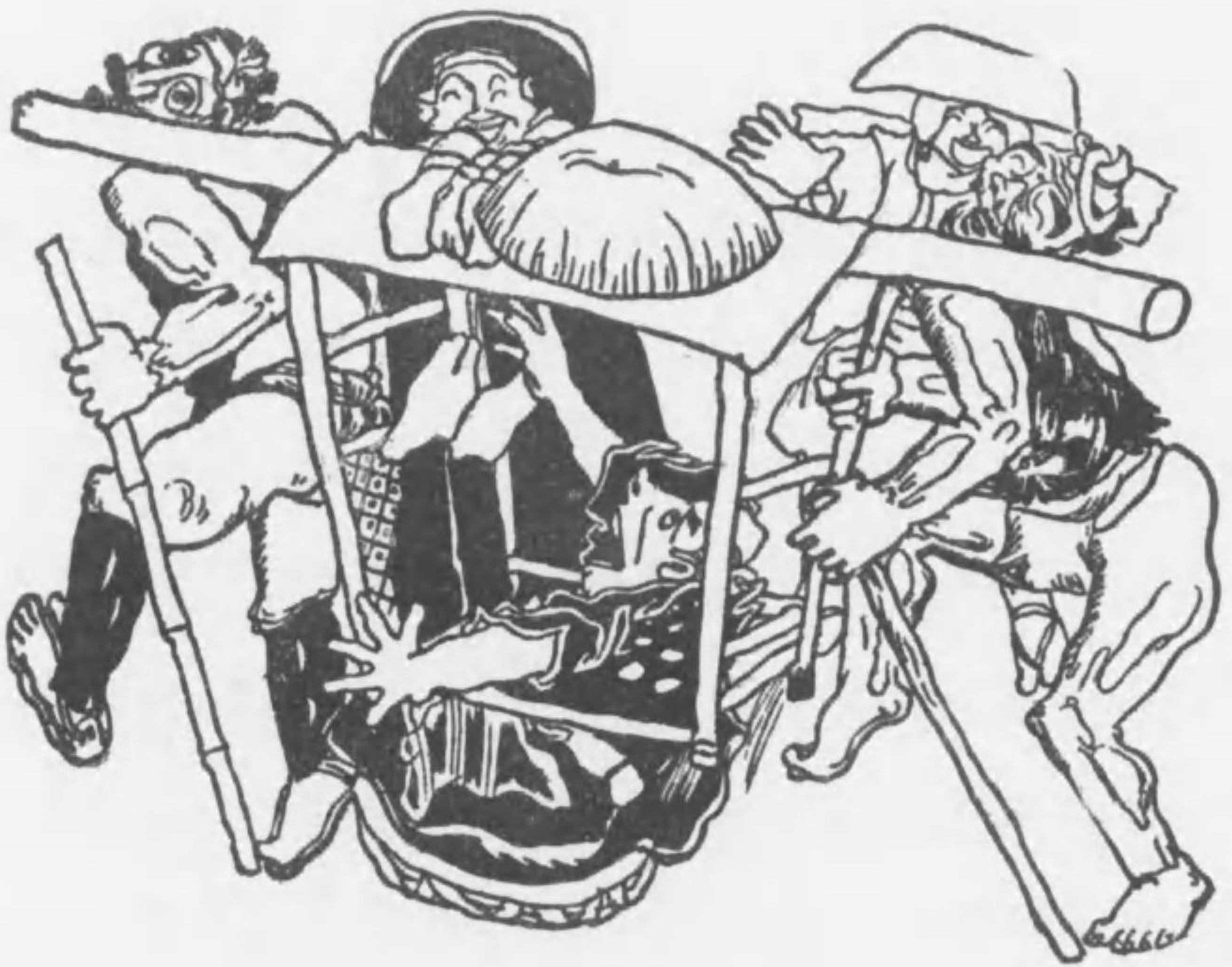
彌次「ナント北八、彼奴等（川越人足共）に擲捨うが面倒だから、いッその事問屋へか、ツて越さう手前の脇差を借しやれ」と北八が脇差をとつて差し、俺が脇差の後鞘を後の方へのばし長くして、大小さしたやうに見せかけ北八を供にしたて、侍になりすまし、總て川問屋に至り、お國言葉の假聲にて、「コンリヤ問屋共、身共大切な主用で罷り通る、川越人足を頼むぞ、（中略）同勢は上下合せてたつた二人ぢや、臺ごしに致さう何程ぢや」問屋「ハイお二人なら蓮臺で四百八十文で御座ります」彌次「それは高値ぢや、ちと負けやれ」問屋「エ、此河の賃錢に負けるといふ事はない、やア馬鹿を言はずと早く行くがよからずに」彌次「侍に向つて馬鹿ア言ふなどは何ぢや」問屋「ハ、ハ、ハ、がいづないお侍だヤア」彌次「這奴武士を嘲弄する不

届千萬な「問屋」こんな武士か刀の鎧を見さつしや
 い」と言はれて、彌次振り返り後を見れば、刀の
 鎧、柱に支へて、後鞘ばかりの所二つに折れてる
 る皆々どつと笑ひ出せば流石の彌次郎面目なく情
 氣返つてだんまり、問屋「刀の折れたのを差す武士
 が何處にあるもんだ、此方衆、問屋を騙に來たな
 そんではハイ濟せないぞ」彌次「イヤ身共は箕尾谷
 四郎國俊が末孫だから、刀の折れたのを差しおる
 て」と負け惜みを云つたが問屋「謊言いふと縛し
 上げるぞ」とおどされて逃げ出す。



北八駕の底を抜く 【金谷】

北八「こゝ彌次さん駕はどうだ」彌次「イヤ氣が無い、お前の事なら乗つて行かつし」北八「そんなら日坂まで乗らうか」と駕の値段極めて打乗りたるに折節雨降り出しければ、古席一枚駕の上から打被らせ、擔ぎ出し早くも菊川の坂にかゝると順禮二三人、普陀落や、岸打つ波は三熊野の、「アイお駕の旦那一文下さい」北八「つくなく」順禮「御道中御繁昌の旦那、此の中へたつた一文」北八「エ、つくなといふに笠棒め」順禮「夫れに笠棒がいるもんか、其方が笠棒だ」北八「この乞食めが」と力む機に如何にしけん、駕の底がすつぽり抜けて、北八どつさり尻餅をつき、「アイタ、ハ、ハ、ハ、順禮ハ、ハ、ハ、駕昇」エレ、怪我アさつしやりませぬか」北八「手前達やア、何故こんな駕へ乗せた」駕昇「許さつしやりませ、何とせるもんで」北八「何處ぞ



へ行つてよい駕を借りて來さつし「駕昇」此處は坂
中で借りる所が御座らない、イヤ能事がある、棒
組、主の禰をはづせ「棒組」アゼどうする「駕昇」ハ
テ俺がせずことがある見され」と自分の禰をはづ
し、棒組の禰と二筋にて、蓆の上から駕の胴中を
括りて「駕昇」さア乗つていぢやござれ「北八」飛ん
だ事をする、是れで乗られるものか「駕昇」ハテ外
にせる事がない、其代には睡たくならしやつても
此禰で落ちつやうがござらない、不肖して乗らつ
しやいませ」と氣の毒さうにいふ。

暗闇の恥を明るみへ 【日坂】

同じ宿に泊り合はせし巫子に、彌次郎山の神を寄せて貰はんと頼めば、巫子早速承知し、例の箱を出して直すと、さし心得て宿の女、水を汲み來る彌次郎逝去りし女房の事を思出して、櫛の葉に水をむけると、巫子は例の神下ろしを始め、(中略) 巫子「わしやア其方の枕添ぢや、あつかましくもよくぞ問ふて下さつた、そなたの様な意氣地なしに連添ふて、妾や一生食ふや食はず、ア、うらめしやく」彌次「堪忍してくれ、俺も其時分は面工が悪くて、可憫さうに苦勞をし、死にしやつたが残り多い」北八「オヤ、彌次さん泣くか、ハ、ハ、ハ、這奴は鬼の目に涙だ」巫子「忘れもせない、其方が瘡を患らはしやつた時、妾は生憎濕瘡をかく、米はなし、日なしはせがむ、大屋殿の店賃やらねば、路次の犬の糞に滑つても小言は云はれず」彌次「も

う／＼云つてくれるな、胸が裂けるやうだ」巫子
「その辛い目に逢ひ乍ら、草場の蔭で其方の事を
片時忘れぬ、どうぞ早く冥途へ来て下され、聴て
妾が迎ひに來ませうか」彌次「ヤアレ飛んだ事をい
ふ遠い處を必ず迎ひに來るにやア及ばぬ」巫子「そ
んなら妾が願を叶へて下され」彌次「オ、何なりと
く」巫子「此巫子におあしをたんと遣らしやりま
せ」彌次「オ、やるともく」と烏目二百文はりこ
み、紙にくるみて出す北八「暗闇の恥をとうく
明處へぶちまけて仕舞つた、ハ、ハ、ハ、ハ、」



盲人と侮りし報い 【掛川】

鹽井川といふ處に至りけるに、昨日の雨強くして橋落ちけるにや、行交ふ人自ら股引をとり、裾褰上げて爰を渡るに、彌次郎北八もいざや引連れて涉りなんとする折から、京上りの座頭二人連、此川の徒渡りなる事を聞きけるや座頭は座頭連、盲人一流の拳を打ち、負けた方が負つて渡る事になり、拳に負けた猿市「エ、忌々しい、そんなら此風呂敷包を、貴様一緒に背負はつせえ、ソレよしか、サア来いサア来い」と支度して背中を向ける彌次郎是は有難いと、猿市に負されば、猿市は連の犬市と心得て、さつくと川へ這入り、難なく向ふへ渡ると、此方の岸に残りたる犬市、犬市「ヤイ猿よ、どうする早く川を渡さぬか」猿市向ふの岸にて聞きつけ腹を立て猿市「こりや笑談な奴だ唯今おぶつて渡したに、又其方へ行つて俺を蹴る

な「犬市」馬鹿アいへ、汝ばかり渡つて太い奴だ、早く来て渡さぬか」と白い目を剥き出し腹立つるゆゑ、猿市仕方なく、又此方へ渡りて返り、猿市「サアそんなら負さりなさろ」と背中を出す、北八占めたと手を掛けて負されば、猿市又、さつくと川へ這入る。犬市は大きに急き込みて、犬市「これ猿市何處に居る、猿市川の中にて、「イヤ這奴は誰だ」と北八を川の中へどんぶり落す、北八「ヤアイ助けてくれ〜」と手足を藻掻き流る、故、彌次郎飛び込み引上ぐる。



法螺の吹き損じ 【袋井】

此宿外れより、上方者「モシお前方はお江戸ぢやな」彌次「さやうさ」上方「俺も毎年下る者ぢやが、お江戸は氣疎い繁昌な處ぢやわいの、アノ吉原へもちよこく誘はれて、晝三とやらいふおやまを買うたが、何時も人に振廻されて行くさかい、何程か、つたやら、此方知らんが、ありや何ぼほどかゝるぞいな」彌次「俺も吉原通では、地面の五ヶ所と十ヶ所はなくした者だが、ナニ晝三位では僅かな事さ、マア平の晝三なら、片仕舞で一分二朱、茶屋が一分か、藝者が一組で又一分、そして一斤くでも取れば、其代が二百ヅ、かゝる分のことさ」上方「ハテノ、俺も大店は諸所へ行つたが、其一斤々々といふは何のこつちやいな」彌次「ソリヤ酒一斤、肴一斤など、内の酒が飲めぬから別に外から取寄せることさ」上方「ハア俺が行つた内では



其様な事はなかつたわいな、そして何も呑めぬ酒
は出しやせんわいの、えらう好酒であつたわいな」
彌次「ナニそりやア飲める酒でも呑めねえといつ
て別に取るが、江戸ツ子の氣性さ」上方「そして上
方では皆借つて戻るが、お江戸の女御は現金拂ひ
ぢやさうな」彌次「なにさあそこでも、附馬を連れ
て歸りさへすりやア、いくらでも貸してよこしま
す」上方「ハ、、、、コリヤお前は、大見世のお客
ぢやないわいの、書三買にそんなことはありやせ
んわいな、コリヤお前とんとやくたいぢやく」

馬子に一本やられる 【見付】

此處より北八一人馬に乗る、此馬方は助郷に出たる百姓ゆる、慇懃なり、彌次「コレ馬士どん、爰に天龍への近道があるぢやアねえか」馬士「アイ其所から上へあがらしやると一里ばかりも近くござるは」北八「馬は通らぬかの」馬士「インネ近道でおざるよ」と爰より彌次郎は一人近道の方へ曲り、北八は馬にて本道を行く馬士「旦那アお江戸は何處だなのし」北八「江戸は本町」馬士「ハア好い處だア俺等も若い時分、お殿様に附いて往きをつたが、其本町といふ處は何でも無上い賣人許し居る處だアのし」北八「オ、それよ、俺が内も家内七八十人許りの活計だ」馬士「そりや大層な、お内儀様が飯を炊くも、大抵のこんではない、アノお江戸は米が幾何しをります」北八「マア一升二合、よい處で一合位よ」馬士「ソリヤいくらに北八」しれたこと

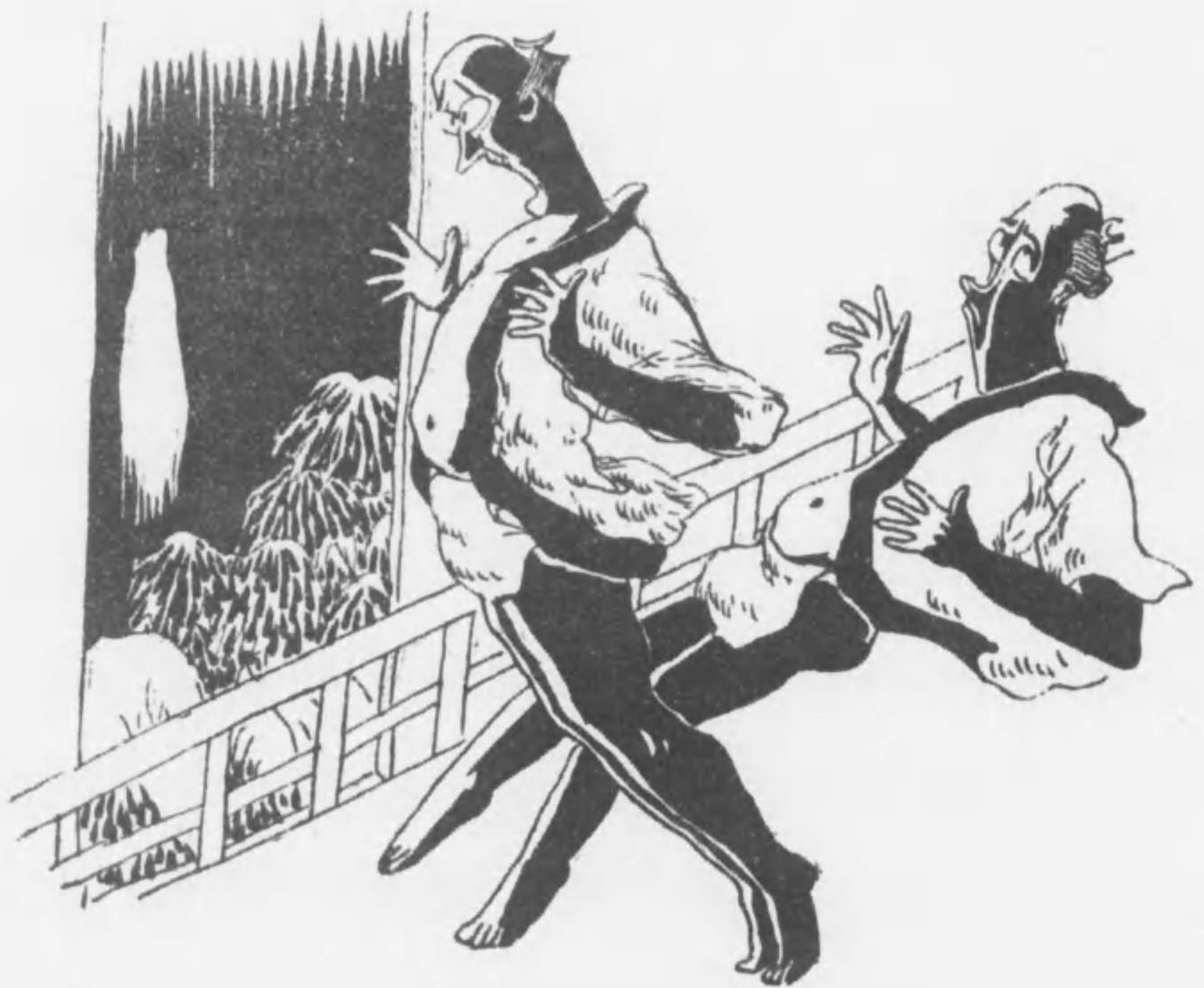


百にさ「馬士」本町の旦那が米を百ツ、買はッしや
るさうだ」北八「なに飛んだことを車で買ひこむ
は「馬士」そんたら兩には幾何します」北八「ナニ兩
にかア、かうと、二一天作の八だから、二五十、二
八十六で踏みつけられて、四五の二十で帯解かぬ
と見れば、無間の鐘の三斗八升七合五勺許りもし
やうか「馬士」ハアなんだかお江戸の米屋はむづか
しい、俺等にやア解らない」北八「分らぬ筈だ、俺
にも分らねえハ、、」此話の内程なく天龍に至
る、彌次郎此所にて待ち受けたり。

襦袢の幽霊 【濱松】

彌次郎北八も口は達者なれども、性は臆病者、此宿には幽霊が出ると按摩におどされ、二人共につにない、洒落も無駄も出でばこそ、只まぢく、と寝入りもやらず、彌次「俺ア先刻から小便をしたくツても堪へてゐるに、ヤア何だか、柔かなものが足にさはつた」北八「何だく」猫「ニヤーン」彌次「此の畜生めシツく」百萬遍の鐘の音、チャーン軒に落ちる雨滴、ぼたりく。二人共夜着の内へ潜り込み、北八夜着の袖より差覗き、「どうだ彌次さん、まだ生きてるか」彌次「なんまいだく、ア、時に困つた事がある、もう小便が洩るやうだ、何と思ひ切つて一緒に行かうか」と二人一緒にこはごは起きて、そろく、と障子をあげ、北八「さあ彌次さん」彌次「イヤ手前先へ」北八「何が出るもんだ」と雨戸をさらりとあけた處が、庭の隅に白い物が

宙にふわ／＼、北八きやツと云つて倒れる、彌次「
 ヤアどうした／＼」北八「どうした處かあれを見ね
 え、彌次「あれとは」北八「白い物が立つてるらア、
 そして腰から下が見えぬ」彌次「どれ／＼と頭へな
 がら、雨戸の外をそつと覗き、これもキヤツと云
 つて倒れる、此騒ぎに、亭主駈出で、亭主「やれどう
 なさいました」北八「イヤ小便に行つた處が、彼處
 に何か白い物がゐると、それで此通り、臆病な人
 さ」亭主椽先へ出でこれを見て、「イヤあれは、お
 さんが干し忘れた、襦袢でござります」



船中の蛇遣ひ 【舞坂】

これより荒井迄一里の海上、乗合船に打乗り渡る
此乗合の内にも垢付きたる布子を著たる爺
何をか失ひけん、居睡れる人々の膝の下を搜り、
又は薄縁を持上げ、頻りに物を搜求むる様子にて
彌次郎が袖の下を搜り廻す、彌次郎其手を捉へ、
彌次「こう貴様は何だ、断りなしに人の袂を搜つ
て何とする」と言ひ出すより船中俄かに大騒ぎと
なり、乗合皆々「一體何が見えぬ、言ひなさい」爺
インニヤ尋ねずともよくござる」彌次「ハテそれで
は濟まねへ、サア何が見えやせん、爺」ハアそんな
ら言ひますべい、皆吃驚さつしやりますな、アイ蛇
が一匹なくなり申した」乗合「ヤアくくくく」
と一同上を下へ轉倒し騒ぐ、彼の爺揚荷を取除け
蛇を何の苦もなく掴み、又懐へ入れる、是れを
見て氣味悪がり北八心に据ゑかね、乗合の迷惑ゆ



る、蛇を早く海中へ打つちやつてしまへと挑めども、實は此爺蛇が命の綱の蛇遣とて、爺、インニヤなり申さぬ」と剛情を張るゆゑ、とうとう立廻りとなり、北八彼爺の胸倉を取ると懐から蛇の頭がによつこり、北八キヤツと飛退けば、其途端に蛇は又飛び出してそこらのたくり廻るといふ騒ぎ、そのうちに、北八脇差にて蛇を押へつけたるはよけれど、蛇其儘鞘に巻きつきたるを、ちよつと海へ投げる機に手を滑らし、脇差ぐるみ、海へ打ち込む。

不思議な草鞋 【荒井】

打裂羽織を著たるお侍、馬より下りて北八と彌次郎が休んでゐる向うの床几に腰を掛ける、馬士「モシ旦那様、ちとお願がおざります、へ、どうぞ御酒を一杯たべたうおざります」侍「ホウお身酒が好か」馬士「ハイ飯よりも好で」侍「遠慮ない事ぢや勝手に呑みやれ、身共たべうすならば、振舞はうものを、皆目下戸ぢやから是非がない」馬士「旦那はあがらすとも、ハイどうぞ戴きたうおざります」侍「ハ、ア解せた、お身酒手をくせといふのぢやな、イヤ罷成らんぞ、道中御定法の賃錢共相拂つて罷り通る」と一喝され、馬士、悄然と馬を引き行く、侍「コレハしたり南無三寶身共大切な草鞋を馬につけて置いたが、持つて行きをつたわい、残念な江戸まで穿かれる草鞋ぢやものを」とぶつ／＼小言をいふを北八可笑く、「モシ貴方は、江戸

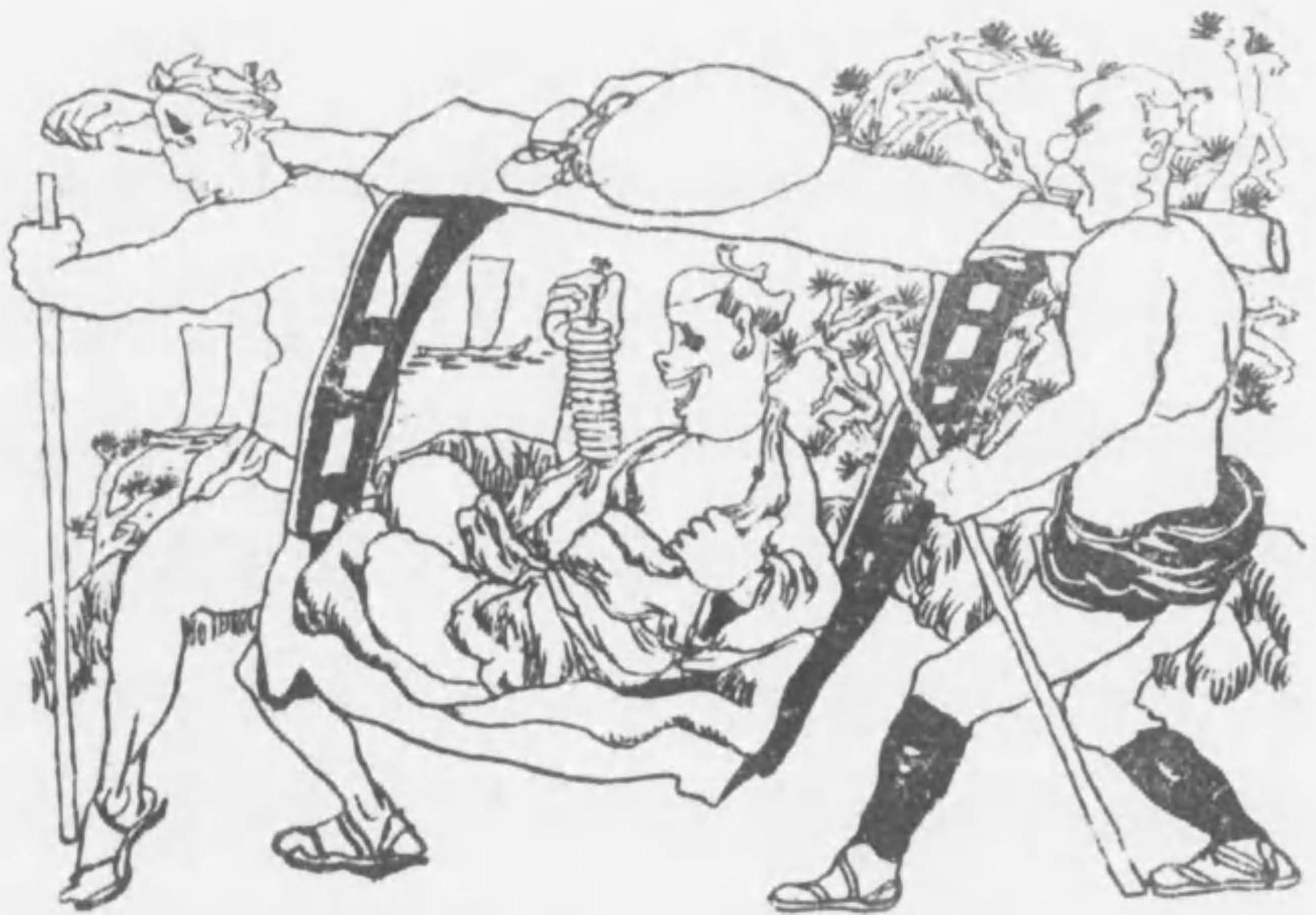
へお下りで御座りますか「侍」さやうく「北八」今承はりますれば、草鞋一足を江戸までお穿なさんと見えましたが怪しからず道がお上手でござりますの、しかし私も此草鞋は去年長崎へ穿いて参るし又今度穿いて出ましたが、御覽じませ、未何とも御座りませぬ「侍」さてさてお手前は身共より道が巧者ぢや、如何致せばそのやうに「彌次」ナニサ草鞋は穿き詰にしても切れませぬが、其代り私はどうも脚絆が切れてなりませぬ「侍」それはどうして「彌次」私は旅に出ますと馬に乗り詰に致しますから、ハ、、、、」



拾つた四文錢一本 【白須賀】

駕に下敷の蒲團、高くなりたるに心附き、何心なく蒲團の間を搜り見れば、四文錢一本あり、さては今迄乗つて來た男が、爰に置いて忘れたと見える、何でも這奴せしめうるしと、北八そつと彼一本を俺が懐へ著服して素知らぬ顔をしてゐる、此内早くも白須賀の驛を過ぎ、汐見坂の絶景にさしかゝる。北八狂歌一首口ずさみたるを、駕昇聞きつけて、旦那はえらいものぢや、俺共は皆目知らぬが、なんにしされ、歌が直にひのつと出るといふものぢやから、えらい！と讃めそやしけるに、北八「貴様だちあんまり讃めてくれたから、酒を呑ましたくなつた」と茶屋に駕をつけ、北八「サア皆一盃づ、呑まつし、コレ女中、其處へ酒を一升でも二升でも、味へ肴をつけて、出してやつてくんな、彌次郎駕の内にて「オヤ北八どうした、

大分大風なことを言ふな「北八」しれたことさ」と
先程拾ひし、四文錢一本を出してちよつと見せび
らかす「こりやく／＼棒組何處へ行つた、ヤイ皆來
されの、先刻の猿太夫様が御酒を下されるは」な
ど、駕舁も大恐悦にて一同鰯腹呑み食ひしたる後
勘定となり、北八がかの錢を取り出せば、駕舁心
付き、「ヤほんに先刻の一本の錢はどうした」棒組
「オ、ソレ／＼、モシ旦那、貴方の乗つてござらつ
しやる蒲團の間に四文錢一本入れて置きましたか
在るか見てくだされませ」と云はれて北八始めて
吃驚。



坊主持 【二川】

實にも旅の氣散じは、差合線らず高聲に話しものして行く内にも、流石に退屈の欠伸しながら、北八「ア、草臥れた、ちつとばかりの呂風敷包や、紙合羽も、なか／＼邪魔になるものだ、コウ彌次さん、お前の荷と俺が荷を、一所にして坊主持にしようぢやアねへか」彌次「コリヤ面白へ、幸ひこゝに能竹が捨て、ある」と拾ひ取りて、二人の荷物を竹の先に括付けて、彌次「サア北八、手前から持つて来い」北八「年役にお前はじめさつせへ」彌次「そんなら狐拳でやらう、サア来い、ヒイ、フウ、ミイ、おつと占めた」北八「エ、忌々しい」と引擔け行く、向ふから来る旅僧は法華宗と見えて、僧「だぶ／＼／＼フニヤ／＼／＼だぶ／＼／＼」北八「ソリヤ彌次さん渡したぞ」彌次「オツト受取つたりや、其次ぎの坊さまは早く来ればいゝに」と又向

うより来る乗掛馬の鈴の音「シャンくくく」馬
 士唄「高い山から谷底見ればエ、おまんかはいや
 布さらすナアエ、どうく、彌次「来たぞく、お
 繪符は勅願所、それ馬の上に御出家よしか」北
 八「餘り早いな」と受取つて引擔ぎ行く、道の傍に
 躰「御覽の通り足の叶はぬ躰に御報謝」北八「イヤ
 ア此奴坊主だ、一文やれ」彌次「前から見ると坊主
 のやうだが、後を見や、頸窩に毛があるは」北八「措
 きアがれハ、、、」此内後より比丘尼が三人連
 にて、指に附けし管を鳴らして唄ひ来る、北八振
 返り「ヒヤア比丘尼だく、サア彌次さん渡しやす」
 彌次「エ、忘々しい」



静御前が持病の疝氣 【吉田】

此宿端より、遠國道者とは見ゆれども少し利いた風饒舌る手合五六人、高聲に話して行くを聞けば「オ、イ源九郎義經、ヤアイ、早く来さいのく」と呼ぶ聲に彌次郎北八可笑く、此の義經と呼ぶる、男を見れば、顔は大菊石にて、少し片小鬢禿けたる男「龜井兄アは、やくと足が達者だアのし、俺ア踵の鞞さアへ石塊がつツ入つて、歩かれ申さぬ」龜井「静御前はどうしたアのし」義經「ヤレさて聞きなさら跡の建場で静御前が持病の疝氣さア起つたと、腹筋ノウ釣上げて打死ぬべいと、西風東風に騒ぎやることよ、それにハア六代御前が牡丹餅サア三十計も打食つたけで、食傷のウシて、じだんばたん、せつながりやる、俺が新屋の知盛殿が、二人のウ介抱して、やうやつと跡から連るんで來申すは」彌次郎此話を可笑く、跡にな



り先さきになつて、「お前方まへがたア何處どこへ行きなさる」義經よしつね「お伊勢様いせさまへ参り申まをすは」彌次やじ「先刻さつこから聞きけば、お前方まへがたア義經よしつねだの静御前しづみづめだのと言いひなさるが、どういふこつたね」義經よしつね「ハア其方衆こなたしゆの聞きやつたら可笑わかんべい、コリヤハア俺共わしらが國くにさアつん出て來きる前まへに、祭禮まつりがあり申まをして、千本櫻せんぼんざくらといふ芝居しばいのウし申まをしたから、それでハア義經よしつねだアの、静御前しづみづめだアのと狂言きやうげんさアおつばじめた時とき、忘わすれない様やうにと、其名そのなを依然いっぜん言いひつけた癖くせさア、今いまでも戯せむけに言いふのでござるは」

彌次さん狐に化かされる (其一)

【御油】

北八を先きにやりて、彌次郎一人、しよぼくくと、悪い狐が出て旅人がよく化されるといふ松原にかゝり、眉毛に唾を付けながら行く、遙か向ふにて狐の啼く聲、「ケン、ケン引」彌次「そりや啼きやアがるは、おのれ出て見ろ、打殺してくれう」と力味返つて辿り行くに、北八も先きへ駈抜け此所まで来りしが、是れも此所へ狐が出るといふ話を聞きて、若しも誑されては詰らぬと、彌次郎を待ち合せ、土手に腰掛け、糞喫みるたりけるが、夫れと見るより、北八「オイ、彌次さんか」彌次「手前何故此所にゐる」北八「宿取に先へ行こうと思つたが、爰へは悪い狐が出るといふ事だから一所に行こうと思つて待ち合はせた」といふと彌次郎心附き、這奴狐奴が北八に化けたなと思ひければ、態

と弱身を見せず、彌次「糞を喰へ、そんなで行くの
ぢやアねへは」北八「オヤお前何を言ふ、そして腹
が減つたらう、餅を買つて来たから喰ひなせへ」
彌次「馬鹿ア吐かせ、馬糞が喰はれるものか」北八「
ハ、コレ俺だはよ」彌次「俺だもすさまじい、北
八に其儘だ、能く化けやアがつた畜生め」北八「ア
イタ、彌次さん、コリヤどうする」彌次「如何す
るもんか打殺すのだ」と茫然した所をぐつと突倒
して、彌次郎、其上に乗りか、り押へる、北八「あ
いたく、アレサ尻へ手をやつてどうする」彌次「ど
うするもんか尻尾を出せ。出さずばこうする」と
三尺手拭にて北八の手を後へ廻して縛り、追立て
追立て赤坂の宿に至る。



彌次さん狐に化される (其二)

【赤坂】

北八「コウ彌次さん好加減に解いてくんな、外聞が悪い、人がきよろしく見て悪いわな」彌次「エ、糞を喰へ、ハテ宿は何處か知らん」北八「ナニ俺は此處に居るものを誰が先に宿を取つて置くものだ」彌次「まだ吐かしやアがる畜生め」此内或宿屋の店先にて、亭主「お泊りかなもし」と駈け寄つてつかまへる、彌次「いや連の者が先へ來た筈だが」北八「其連は俺だわな」彌次「エ、いけ強情奴だ、もう好加減に尻尾を出しをれ、イヤ待てく彼處に犬がゐる、コ、、、、、しろコ、、、オ、シキヲ、シキく、ハ、ア犬が來ても、いけしやアくとして居るから、さては狐ではねえ、本當の北八か」北八「知れた事悪い洒落だ」彌次「ハ、、、お前の處へ泊りやせう」と心解けて北八が縛を

彌次さん狐に化される (其二)

七三



彌次さん狐に化される(其二)

七四

も解き、二人座敷へ通りて、彌次「ホンニ北八了簡
しや、俺ア實に本當の狐だと思ひ詰めた」北八「馬
鹿々々しい目に逢つた、今だに此手首がびりく
する」彌次「ハ、、併し待てよ、斯は言ふもの
、矢張これが化されてゐるのぢやアねえか、ど
うやら可怪な心持だ」と無性に手を叩き、彌次「御
亭主々々々」亭主「ハイ御呼びなされましたか」彌
次「コレどうも合點が行かぬ、爰は何處だ」亭主「
ハイ赤坂宿で御座ります」北八「ハ、、彌次さんと
うしたのだの」彌次「エ、又はぐらかしてゐるやアが
る」と眉毛をぬらして、彌次「御亭主さん、何と此
處の内は卵塔場ぢやアねえか」尙此宿にて隣座敷
をのぞく失策話あれど略す。

笠棒に馬の糞

【藤川】

此宿の出端より三人連の旅人、是れも江戸者と見えて、少し勇肌のまき舌にて話し行くを聞けば、一人の男「コウ昨宵の泊りは可笑かつたなア」今一人「ソレヨ何だか奥の間に泊まつてるた奴等ア、氣の利かねえ野郎共だ、宿に婚禮があるのを羨ましがりやアがつて、襖の間から覗きをつて、夢中になり、たうとう襖を打倒しやアがつた、大笑ひな笠棒共だ」一人男「そしてアノ一人の野郎奴は何だか宵に宿の亭主を呼びやアがつて、此處の家は卯塔場ぢやアねえかといやアがつたが、彼の笠棒奴はどうも氣が振れてゐると見える」と此手合、前宵彌次郎北八が泊りし宿へ一所に泊つたと見えて、此話をする、彌次郎聞きて大に熱くなり、足早に駆けより、詞を掛け、彌次「コレ貴様達やア、先刻から黙つて聞いてゐりやア俺がことを笠棒たア何

のこつた」先の男「ナニ此方衆の事ぢやアねえ、此方の事だわ」彌次「此方の事といふ事があるものか、其襖を打倒した、箕棒と言つたア俺がことだわ」旅人「ハア此方其箕棒か」彌次「オ、其箕棒だ」旅人「糞を喰へ」彌次「何だ糞を喰へ、コリヤ面白へ、喰ふべえからもつてうしやアがれ」彌次郎眞黒になつて力む、されど相手は血氣盛んの勇手合、馬の糞を杖の先に突掛け、「サア持つて來たから喰へく」彌次「イヤ馬の糞は嫌ひだ」旅人「嫌ひとは言はさぬ、是非喰はさにや置かぬ」と三人かゝつて彌次郎を手籠にする、北八可笑しく中へ入り、北八「イヤもう御免なせえく」



女郎買のからしり馬 【岡崎】

彌次郎北八、或茶屋へ入り、例の悪口たらぐ酒
落てるると、此内奥座敷には、近在の客三人ばかり、
此宿に流連し歸りがけと見え、相方の女郎此
處まで送り來りしと見えて、別れの酒餐大騒にて、
此宿のこうき節唄ふ聲、賑やかに聞ゆる。唄、菊
にませがき結籠められて、今はしのぶにしのばれ
ず、チツテレットツテレ」と大騒ぎをやるゆる、奥
の方を覗き見れば、一人の客の聲として「コレコ
レ太兵盃はどうせるのぢや」太兵「いや仁兵の側に
あらアず」仁兵「ドレ俺拾はう」太「改めて寄越しや
れ」仁「オト、此様に受けては兎角はあらまい、
ソレ差さかい」太「オット受けた、ひゆつとやりか
らかひて、これから門木瓜へ戻らうまいか、但し
は榭屋か、丁字屋へ行かうまいか」女郎いくの「な
んぢやいし、アノ太兵さんはナア、酔なさるとナ

ア、あのやうなこと云うてぢやがナア外へ遣りま
すことはナア、ならまいわいなア」太「イヤ／＼か
ゝる折から橋屋で、手形受取つた代物があるから、
行かざならまい」女郎「ムウさうかいし」仁「さうと
も／＼、チツテレットツテレ」唄「兼て手管と妾や
知りながら、だまされて咲く室の梅ハ、／＼、」
此内輕尻馬二三疋追立て來り、此茶屋の軒に繋ぎ
て、馬士兵中庭より奥へ通り、「旦那方お迎へに參
りました」三人「御大儀々々々お名残惜いが別れざ
ならまい、サア行かうまいかハ、」茶屋の女「御
機嫌よう」彌次郎北八、始終此體を見て、女郎買
のからしり馬で歸るは可笑いと打笑ふ。



三文の智恵 【池鯉鮒】

斯くて岡崎を立出で、矢矧橋をうち渡り、坂町、尾崎の郷を経て、今村の建場につく。茶屋の婆「名物砂糖餅おめしなさりまアし、お休みなさりまアしく」北八「オイ此餅はいくらづゝだ」餅屋の亭主「三文で御座ります」北八「こいつは安い、こちらの鶉焼はいくらだの」亭主「それも三文」北八「これは三文では高いやうだ、ナント御亭主かうしなせえ、これを二文に負けてくんなせえ、其代り其方の丸い餅は、四文に買ひやせう」亭主「こいつは變ちきな事をいふと思へど、何方にしても損のゆかぬ事ゆゑ、亭主「ハイようござります、お取りなさりませ」北八「葎入から錢二文取出して、四文あらば丸いのを買はうと思つたが、二文あるから此鶉焼にしやせう」と鶉焼を取つて打食ひながら行く、彌次「こいつは北八でかした、流石の亭主も肝ば



三文の智恵

八〇

かり潰してゐるやアがつた「北八」なんと智恵はすさまじからう「彌次」笹棒め、俺もその位な事をしかねるものか、ハ、、、」

わずかでも慾にはふける鶉焼

三文許りの智恵をふるひて

かく興じつれて、西田海道より半里ばかり、北の方に名にし負ふ、八ッ橋の舊蹟を思ひて、

八ッ橋の古蹟をよむもわれくが

及ばぬ恥をかきつばたかな

程なく池鯉鮒の驛に至る。

將棋きちがひ

【鳴海】

此處より有松に至り見れば、名にし負ふ絞の名物、
いろ／＼の染地家毎に吊し飾り立て、賈ふ、北八「
なんと彌次さん、浴衣でも買はねえか」彌次「おも
いれ見倒してやらうぢやアねえか」北八「よから
う、たんと買ふ面をして慰んでやらう」と彼方此
方を見廻すうち、此町の突端れに、小見世なれど
も、染地いろ／＼表に吊しある内へ這入り、彌次「
コレ此絞は何程します」といふに、此内の亭主、
將棋に有頂天と成り居れるが、亭主「サアしまつ
た、時にお手は何ぢやいな」彌次「コレサこりやア
幾何だといふに」と少し聲高にいふと亭主膽を潰
して、亭主「はいそれかな」彌次「いくら、いくら」
亭主「コウト貴客いくらとおつしやる、其處でか
やうに致さうかい」彌次「エ、じれつてえ、コレ賣
らねえのか、値段はいくらだといふに」亭主「ハテ



サテ喧ましい人ぢや、其方の方へ引返して符牒を見なされ、たゞ知れるものぢやない哩の「彌次」こいつは飛んだ賣人だ、符牒にウの字とエの字が書いてある「亭主」オ、さうぢやアろ、コウト三分五厘切ぢや「彌次」高い〜負けなせえ「亭主」ナニ負けい、イヤなるまい、此下手将棋に「将棋の相手」次兵さん、マア商ひをしようまいか貴客方が待つてござらつせる「亭主」よいわいの、とても敵等はよう買やしよまい、ハテかひたうても金銀はあるまい、無い筈ぢや、俺が手におはしますぢやで」

按摩の仕返し

【宮】

宮の旅籠に泊りて彌次郎按摩を呼びて揉ませる。
此内隣座敷に伊勢音頭を唄ふ聲する。北八「イヤ、こいつ好い聲だ、ナント按摩さん、俺は踊が、手だ、お前目が見えると、あの唄で一つ踊つて見せてえもんだがな」按摩「俺も好だがなア、踊らつせる音を聞かアす」北八「でも賞めて貰はにやア張合がねえ、ジャアかうしやせう、俺が踊りしまつたら所でお前の頭をちよいと撫でようから、それをきつかけに、やんやアと賞めてくんな、ソレ踊るぞ、隣の唄 解けぬ思ひはふたつ箱、みつよついつも泊り舟それが苦界の行違ひ、ハリサコリヤサ」と三味に合せて、北八手を叩き踊る真似をして、北八「よい／＼／＼やさア」と踊りしまひ、座頭の頭をちよいと足にて撫でると、按摩「ヤンヤ／＼ア：、豪い／＼面白え／＼ハ、、、、其内宿の女」お

按摩の仕返し

八三

湯に召しなされませ」と呼びに来たれば彌次郎湯
 に行く。其跡にて按摩は北八を揉みかゝり、按摩
 今度は俺が甚句を旦那方に聞かせたい「北八」こり
 やよからう、やらかしねえ「按摩」その代り俺も賞
 めて貰はにやア：「北八」オット承知々々「按摩」
 ドレやりからかさう」と北八の頭を揉み乍ら、拍
 子を取りて頭をびしやくゝ唄ひさして、北八が耳
 の中へぐつと指を突き込み、這奴が最前、吾等が
 頭を足蹴にひろいだ、かつたい野郎奴」など、散
 々悪體吐いて耳の穴より指を抜けば、それともわ
 からず、北八「ヤンヤ〜ア面白え〜ハ、、、
 」、



餓鬼道の一里塚 【桑名】

宮より海上七里の渡も浪穩に無事桑名に至り、
此處より半日代りに旦那と家來の仕打で出かける
先づお年役の彌次郎が旦那の格、北八は二人の荷
物を擔ぎ「モシ旦那へ」と云つた調子に假に主従
の如く打語りつ、行く程に、早くも富田の建場に
至りける。爰は殊に焼蛤の名物、兩人は茶屋に
立寄り腰を掛くると、女「お早うござりました」と
茶二つ汲んで來り、彌次郎兵衛へ差出す、彌次郎
は旦那の積りのゑ、草鞋の儘茶屋の板の間に胡座
をかき「北八支度はい、か」北八も約束なれば供
の氣取にて、北八「宜しうござりませう、コレ女中、
お飯を二膳出してくんな」その内飯を二膳持つて
來て据える、北八「こゝ彌次さん見なせへ、色男は
違つたもんだらう、コレく此家の娘がお前の飯
はちつと盛つて、俺がのは此通り山盛、餓鬼道の

一里塚と言ふもんだ、ア、味へく「彌次」へ、笹
 棒奴、アノ娘が杓子當りのいゝのを、惚れたのだ
 と嬉しがるも可笑い、ソリヤア手前を安くするの
 だは「北八」ナゼく「彌次」總て此街道では上下の
 ものや、供の者へは飯を山盛にして出すといふこ
 とだ「北八」ハアさうか忌々しい「彌次」ハ、ハ、ハ、
 蛤をもつとくんなせへ「女」ハイく「又焼立て
 の 蛤 大層に盛つて出すうち近邊の寺の鐘がゴオ
 ン

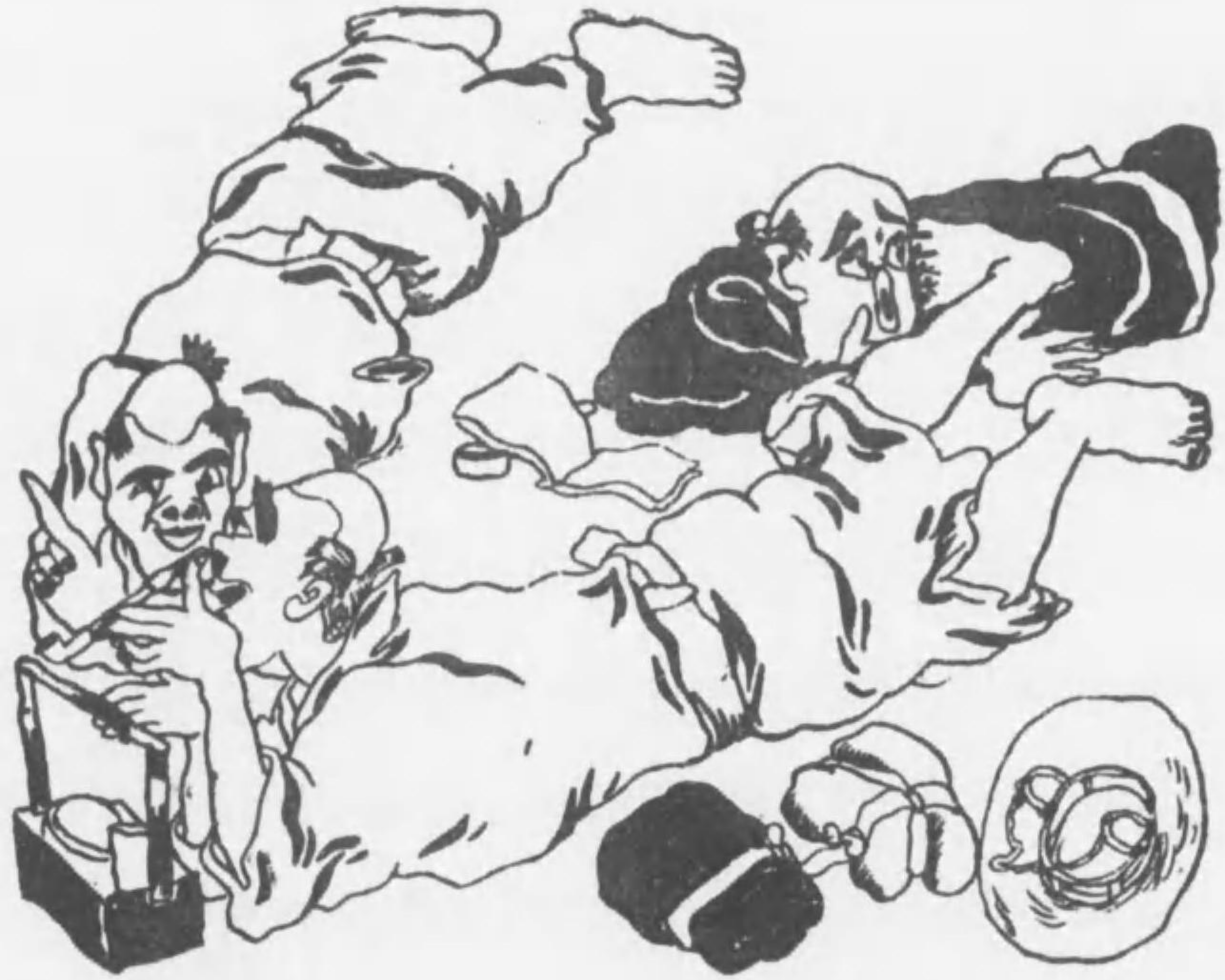
北八「女中あれは何時だへ」女「もう七つでござり
 ます」北八「占めたく、約束の通り是から俺が且
 那樣だ、コリヤく「彌次郎」



醉拂ふ足 【四日市】

七ツの鐘を合圖に、北八は約束通り旦那氣取になれば、彌次「ハテ現金の男だ、マア其荷物はそのちにおきやれ」北八「イヤさうはならぬ」と突附けるを彌次郎兵衛笑き戻す機に、蛤を盛つた皿をひつくりかへせば、焼蛤が彌次郎の懐へひよいと這入ると、彌次「アツ、、蛤の露がこぼれて、アツ、、」北八「どれく」と懐に手を入れ蛤をつかまへ、北八「アツ、、」と取落せば、蛤臍の下へ落ちる、北八うろたへて、彌次郎が股引の上から、翠丸と蛤を一緒につかむ、彌次「アツ、、、コリヤどうする、金玉が焦けらあ」といふ内、やうやう股引の前の合せ目を披けると、蛤はぼつたり落ちる、北八「ハ、、先づは御安産でお芽出度い。それより此處を立出で、四日市の宿に着けば、相宿田舎者二人あり、寝ころびながら彌次郎北八話

に夢中になり、足の指にて足の方に寝轉んでゐる。田舎者の耳を引張つたりなにかして翫びにする。此田舎者僂んだ氣のよい男にて、そつと傍の方へ頭を除けると、一層話に夢中になりし北八、田舎者の頭を足にて捜し廻し耳をいちぢり掛けると、今度は堪へかねて、北八が足を捉へ、田舎「これ最前から黙つて居れば何故此足で俺の耳をなぶり物にさつせへた」と言はれて北八心づきて、「ハイこれは御免なせへ、先刻焼酎を吹掛けたものだから足奴が酔腐つて、それ御覽じろ、ひよろりく、足は下戸の足に限りやす、俺は誠に困り果てる。



馬の低當 【神部】

是れより伊勢路に入る、神部の宿端より、彌次郎を先きにやりて北八ひとり馬に乗つて行くほどに、向ふより来る男、この馬子を見つげ、「ヒヤア主やア長太ぢやないか、今主が所へ行た戻りぢや」とどうやら借錢の催促なり、馬士面目なけに彼男を日當の宜い處へ伴ひ、己れも土手に悠々と腰打掛けて、色々と借錢の斷りをいへども、彼男いつかな承知せず、「ハテ眞逆の時は主が馬を渡そと、證文に書いたぢやないか、サアくもし馬の上の旦那様、借錢の代りに請取る馬ぢや、どうぞ下りさんせ、氣の毒乍ら」といふに北八も先刻より焦つたくてならぬ所ゆゑ、「ひよんな馬に乗り合せたは此方の不仕合せ」と言ひつゝ、馬より下りると、馬士駈寄り、「旦那が下りては此馬を取られる、マア乗つてゐて下んせ」と言ふに北八詮方なく又馬

に乗れば、權平と云へる彼男「イヤならんわい」と云ひ北八馬より下りれば、又馬士に泣きつかれて馬に乗る、乗つたり下りたり、果しがない「もう勘忍してくれ、俺ア何なら少々錢を出しても、もう乗るのは厭だ、エ、此唐人奴等、又乗れと吐しやアがるか、もう厭だ、サアどうしやがるのだ」馬士「旦那、下りすとよいに」權平「イヤ下りすとえいとは何で吐す」と眞黒になり、馬に取付きかゝる所を馬士突除けて馬の尻を思ふさま叩き立てると、馬は逸散に駈出す、北八上にて眞青になり「ヤアイ助けて〜」



豪氣に運の悪い男

【上野】

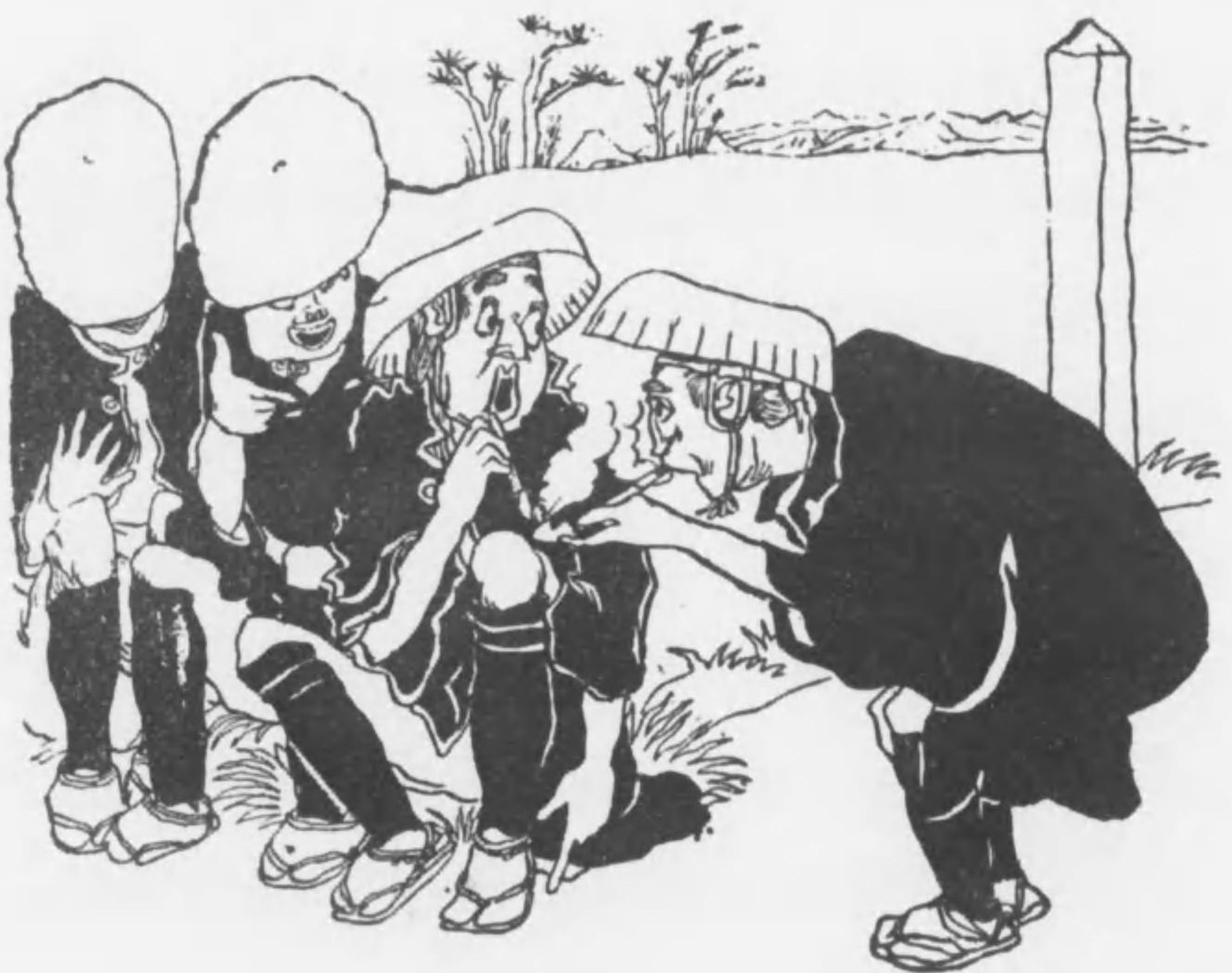
磯山と云へるに著く、此所に吹矢のいろく飾付けたる小見世の親爺、往來を見かけて、「サア〜お慰にやてかんせ、外題は忠臣蔵十一段續、ソレ吹かんせやれ吹かんせ」北八「ハ、ア、何だ、勘平おかる魂膽夢の枕、イヤ這奴やらかして見やう」と吹矢筒に矢を入れて、フ、、、(引)、カチリガツタリ、「ヒヤアみこし入道、ハ、、、向うのは何だ、北八そつちへよりや」と引除ける拍子に、足許に寝て居たりし犬の足を踏む、犬「キヤアン〜」彌次「この畜生奴」と吹矢の筒にてくらはしにかゝる、犬はワンといつて嘸み付く、彌次「アイタ、、、うぬ打殺すぞ」と追駈くる機に、どつさりと轉けた側に落ちてあるは糞入、彌次「轉んでも損はいかぬ、爰に糞入が」と拾ひにかゝると向側にある子供が糸を引くと、糞入はスル〜〜、彌

次「エ、忌々しい、一番はぐらかしやアがつた、
子供「阿房ヨ、ワハ、ハ、ハ、ハ、」北八「這奴はい、業
晒しだ、サア行きやしやう」と吹矢の錢を拂ひ出
掛ける、向ふに又煙管一本落ちて有るゆゑ、北八「
ソレ彌次さん、又拾はねへか」彌次「イヤもう其手
は喰はぬ、アレ跡からくる爺が拾ひをるだらう」
と行過ぎて振り返り見れば、跡より来る爺、かの煙
管を拾ひて懐に押込み、さつくと行過ぎる、彌
次「ハア詐術でもなかつたさうな」北八「ハ、ハ、ハ、
お前豪氣に運が悪いぜ」と打笑ひつゝ、行く程に總
て上野の宿。



南瓜の胡麻汁

聽て上野の宿に至る、茲に羽織ばつちにて小野郎を供に連れたる男、跡より來りて彌次郎に近づき、「卒爾乍ら、道々の御狂詠を承りまして感心致しました。貴方の御狂名は「彌次」俺やア十返舎一九と申しやすし男、ハ、アさてはあの十返舎先生、：私は南瓜の胡麻汁と申します、私宅は雲津でござりますが、どうぞお供致したい、何れ御一宿を御願ひ申し、近所の社中どもへもお引合せ申したい「彌次」覺召有難い」と打連れて津の入口に至り著けば、此所は上方筋より参宮の人落合ふ所にて往來殊に賑はし、彌次「コウ北八見や、豪氣に美しい婦人が見える」胡麻汁「アリヤ皆京都の衆ぢや、彼様に立派にしてお出でやつても、ねから錢は遣やせんがな」京の人「御無心乍ら火一つ貸しておくれんか」胡麻汁「さあくおつけ」と咬へた煙管を



差出せば、京の人吸付けにかゝり、京「バツ、バツ、バツ、バツ」
「胡麻汁」未だつかんかいな、京「バツ、バツ、バツ、バツ」
「胡麻汁」何ぢや、お前の煙管にや黄が詰
めてないがな、ハ、ア聞えた、吸付ける振して人
の黄を喫むのぢやな、モよさんせ、喃お江戸の先
生、京の衆は彼様に吝い、ハ、ハ、時にもう一吹先
生下さりませ、彌次「京の者を吝いといふが、お前
も先刻にから俺が黄ばかり喫んでゐる、そりや京
の人へ覆輪かけて、お前が各商といふもんだ」胡
麻汁「ハ、さうかいなハ、、、」

石を食ふ

【雲津】

かくて雲津に至り、胡麻汁己が家に案内するに、
是も旅籠屋と見ゆれど折節相容もなく、奥の間に
招じ入れ彼是と欺待しければ、彌次郎はあらぬ名
を詐り、かゝる目に逢ふも一興なりと、心の内に
可笑く悠々と座しゐるうち、亭主胡麻汁出で、「コ
レハお草臥でござりましょ、ようこそ御出くださ
れた、然し折悪く此頃は時化で何も御馳走がでけ
ないが、當所は至つて蒟蒻が宜ござりますから、
マア是でも上げましょと存じて、申付けて置きま
した」と亭主は勝手へ立つて行く、女膳を持出で
兩人の前に据へて行く、兩人箸を取り食ひかゝり
見るに、膳の向ふに平めなる皿の中に大福餅の大
きさの如き黒き物を乗せて出せり、平には蒟蒻を
盛り、味噌は別に小皿にあり、彌次郎其皿にある
丸い物を箸にて突き見るに固く、石なりければ膽

を潰し「コウどうして石が食はれるものか」北八「いや〜先刻當所の名物と亭主が言つたア、何でも此石のことだよもや本當の石ぢやアあるまい」と又煙管の雁首にて叩き見れば、がつちり〜「こりやどうでも石だ〜」此内亭主出て來り、宜しう召上りませ、イヤ石が冷めは致しませんか」と言はれて二人共ぎよつとせしが此石の食ひ様知らぬは業腹と兩人これを食ひたる貌にて、「イヤ珍しい物を賞翫いたした」胡麻汁「ナニその石を食りましたか」彌次「たべました段か」胡麻汁「いやそれは減相な、總て蒟蒻といふものは水氣の取れぬもの、その水氣を取る爲の、あの焼石」彌次「ウへ、ゝゝゝ」



押の強い先生

此内近所の狂歌よみ小鬢長禿成、富田茶賀丸、反齒日屋呂、水鼻垂安、金玉の嘉雪などの面々追々に來りて、彌次郎を十返舎一九先生とのみ思ひ、それ／＼御丁寧に挨拶をすまして、扇面等をつきつける。一九先生になりました彌次郎しかつべらしくそれ等を取上げ、何の出放題やらかしてくれんと、これまで聞き覺えたりし人の歌を書きて差出せば、胡麻汁これを戴き見て、「これは有難うござります、お歌は、

時鳥自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

ハ、ア成程、どうか聞いた風なお歌ぢや、

きぬ／＼の情をしらば今ひとつ

うそをもつけや明六つのかね

イヤこれは千秋庵大人のお歌では御座りませぬ

押の強い先生



か「彌次」ナニ私がよみ歌、しかも江戸中大評判の歌、誰知らぬものは御座らぬ」側では北八可笑しく氣の毒なれば「イヤ私の先生はそ、つかしいのが癖で、人の歌だの我歌だのといふ差別は一向ござりやせぬ、こゝ彌次さん、イヤ先生、是まで道中筋で詠みなさつた、お前の歌を書きなさればい、に」と氣をつけられ彌次郎面目無けれど、押の強い男とていけしやあくとして、あとの短冊へは道中筋の歌を書く、

化の皮

北八も手持なければ貼交の屏風を見て、「ハ、ア戀川春町の繪がある、モシあの畫の上にある讀はなんで御座ります」胡麻汁「イヤあれは詩で御座ります」北八「こちら布袋の繪の上にあるは詩と見えますが、誰がいたしたのでござります」胡麻汁「イヤあれは語で御座ります、澤庵和尚の」といふゆゑ、北八心のうちに這奴忌々しい奴だ、贊かと云へば詩だといふ、詩かと云へば語だといふ、何でも今度は一ツ餘計に言つて、まごつかせてやらうと、そこら見廻し、北八「もしお掛物の畫の上に畫いてあるは、大方六でござりませうな」胡麻汁「六か何か知りませぬが、あれは質に取つたので御座ります」と此内勝手より女立ち出で、「ハイ髭面様からお手紙が参りました」胡麻汁「ドレ〜何ぢやあるな」と此手紙を披きて、たか〜と讀みて見

れば

手紙「鳥渡申上候、只今東郡十返舎一九先生私
宅へ御着有之候、勿論名古屋連中、并吉田大
嶽よりも書状参り候、早速貴公御噂もいたし置
候事故、追付貴宅へ同道参上可致候間、右御
案内申入候已上。

胡麻汁「コリヤどうぢやいな、頓と合點が行かぬ、
ノウ先生這奴どうやら、尊公のお名前を騙つて参
つたものと見える、幸ひ追付これへ見るとあれ
ば、ナントお逢ひなされて慰んでやろぢやござら
ぬか」驚いたのは彌次郎なり、今更に持病の疝氣
を擔ぎ出した處で始まらず、とう／＼此場で化の
皮をひんむかれ、兩人ほう／＼の體にて立ち去る



無筆の犬

化の皮を見事ひんむかれた彌次郎北八の兩人胡麻汁の家を逃げ出したはよけれど早亥の刻過ぎたる見え、家毎に戸を閉ぢて潜まり返り、何れを旅籠屋とも見えわかつたず、泊るべき方もなくして浮々と辿り行く程に、あはや軒下の犬共が起立ちて吼えかゝれば、彌次郎きよろしくして、「エ、此畜生奴等ア、悪く巫山戯やアがる」と石塊を拾ひて打付くれば、猶々犬は怒り立ちて取巻く、北八「構ひなさんな、犬迄が馬鹿にしやアがる、オヤ彌次さん、乙な手附をしてお前何をする」彌次「イヤ犬に取巻かれた時は、宙へ虎という文字を書いて見せると、犬は逃げるといふ事だから、先刻から書いてるが、ねつから逃げやアがらぬ、這奴等アみんな無筆の犬ださうな、シツシ〜」



歩く家

どうやらこうやら犬を追ひ散らして行くともなしに、思はず町を開放れて、彌次「こりや詰らねへものだ、ま、よ北八、夜通し歩こうぢやあないか、甚いこたアねへ、やらかせく」北八「おめへ飛んだ事をいふ、まだ九つにやあなるめへ、又何處ぞへ泊りていものだ」彌次「それだとして今時分に起きてゐる内はなし、イヤあるぞく、遙か向ふに火が見える、アノ火を目當に行つて宿を頼まう」北八「オ、サそれがい、く、しかし提灯の火ぢやあねへか」彌次「飛んだことを……戸の隙間から洩れる火だものを」北八「ほんに家の内で焚く火だ、何でも是非彼處を頼んで泊りやせう」と足に任せて急ぎ行く、聽て其處に近づきたるに彼目當の火は自然と段々先きへ歩み出して行く體に驚き、彌次「ヤアくくくく、彼の家がどうか歩いて行くや

うだ「北八」ほんになア、這奴は可笑い「彌次」可笑くない氣味が悪い、何處の國にか家が歩くといふは只事ぢやアねへ「北八」ナニサこれも赤坂の泊り位で、皆狐めがすることだらう、弱味を見せると猶つけ上りがする、構ふこたアねへ、さつさと歩びなせへ」と態と力味返つて脚早に件の火に近づき、暗紛れに透し見れば、こはそもいかに、燈の車、小舎のうちに、火を焚き茶を沸かし乍ら車を押して行くのなりけり。



臆病者の道連れ

草木も眠る眞夜中の薄寂しさ、跡にも先にも只一人、表面は我慢に強張つても心は至つて臆病者、怖々辿行く跡より、一人来る者あり、彌次郎振り返り見れば、小山の如き大男、長脇差を腰に横たへ来るはたゞ者ならず、彌次「コウ跡から怪しな奴が附いて来る、ちと急いでやらかさう」脚早に走れば、跡の男も又走る、北八「待ちなよ」と小便をすれば、其男も立止り待つてゐるゆゑ、彌次郎聲をかけ「モシお前今頃何處へ御出でなさる」と怖々言へば、彼男存外柔しき言語にて「ハイ、俺は松坂へ戻る者ぢやがな、夜さら一人、怖うてくゝならぬ所へ、お前方が通らんすゆゑ、コリヤ良い連ぢやと跡からお二人を心便りに参じたわいな」と云ひながら長脇差と思つた竹切を腰から抜いて杖に突く、此男も又兩人に負けぬ臆病者にて

ありける。北八「もうく〜これから三人といふものだから大丈夫だ」男「いや此先きにとつとえらいことがあるがな、聞かんせ、今の先此松原に來をつた處が何ぢややら向ふに大きな白いものが立つてゐるをつて、それがぶらりく〜、俺は怖うてく〜、コリヤとてもたまらぬと跡戻りして良い速を待つておつた處へお前がたに行き逢ふたのぢやわいな」北八「エ、何が出るものだ、俺が先きに行こう、後に附いて來な」と打連れて此松原を一丁程行きたる時、彼男「あれ〜向ふにア、コリヤ堪らぬ堪らぬ」とがたく〜ふるえ出す。



正體見たり枯尾花

彼男「ア、あれぢやもの、どうして先きへ行かれ
ましよいな」兩人も月明りに透して見れば、何と
も分らぬ白きもの凡そ一丈許りも高く、街道一杯
に立つてゐる様子、それが又消ゆるやうにぱつた
り、なくなるかと見れば、又すつくり立ち、大き
くなつたり小さくなつたり、其形分らず、彌次「マ
ア何だらう」北八「裾がねへから亡魂に違ひはねへ
彌次「正體が分らにや猶氣味が悪い、こりや行か
れぬ後へ戻らう」

と三人青くなりがたくとふるふ、折柄向ふより
助郷の人足四五人、唄ひ乍ら来る北八「モシく
向ふに化物が居るのにお前方アどうして其前を通
つて来なかつた」人足「コリヤ此方さん達は三渡の
藤九郎狐が魅いたのぢやなハ、、、」北八「なに
さ向ふを見なせい、アノ白い物が、アレく」人



足「白い物とは、彼かく、彼や道中で馬の鞋や草
鞋が燃えてをるが、其煙が月に映つて白うなつて
見えるのぢやわいな」彌次「ハ、アさうか、ハ、ハ、
コリヤ有難うござりやす」と人足と別れて三人共
ほつと溜息をつき、打笑ひつ、聽て其處に辿り
つき見るに、成程人足共の言つた通り、化物の正
體見たり枯尾花、かくてやうく松坂に辿りつき
まだ夜深ければ道連の彼の男を頼み、寢る計りの
事なれば普通の旅籠を出すも費なりと、町の入口
木賃宿を世話して貰ひ、其處に泊りて一夜をこゝ
で明しける。

自漫の國太夫節

松坂を旅立ちて途中、彌次郎疲れたりとて、丁度來合はせし上方者と一方荒神に乗つて出掛ける。

馬「ヒイン〜」上方者「お前方ア江戸衆ぢやあるな」彌次「さやうさ」これをきつかけに上方者よい氣になつてお國自慢をはじめ、しまひには彌次郎が煽動に益々嬉しい氣になり自慢の喉で國太夫を唄ひ出す、唄「聽て妾が年明けてお前と夫婦になるならば、チン〜〜〜チンチリツン」彌次「イヨ〜面白へ〜、ナント俺に一節教へてくんなさならねへか」上方者「そりや易いことじやわいな、俺についてやりなされ」此内北八は細長き竹を一本拾ひて、上方者が餘り高慢臭い事をいふ故、突き落してやらんと、馬の後から狙つてくるとは知らず、上方者は夢中になり又國太夫節、チンチリツン〜チン〜ほんに女子は執念の、深いと

いふは嘘ぢやない、死んでも呵責の夜叉羅利、杖
ふり上げて丁とうつ」と云ふ處にて、北八、彼の
竹にて上方者の頭をピツシヤリ 上方者「ヤコリヤ
何奴ぢやい、人の頭に磔打ちをるがな」それをも
構はず、彌次郎はもう一遍くと今の文句を何度
も繰返させけるに北八、唄の文句の「杖振り上げ
て丁とうつ」といふ處へ来るたびに、上方者の頭
をびしやりく打ちのめしては、彌次郎の方の肩
の方に隠れる、とうくと終ひには上方者に見出さ
れ、暫らく言合ひしが結局どちらもなる口ゆえ仲
直りに一盃と馬より下りて茶屋にて酒盛を始む。



伊勢の髪結

此上方者と道連になり、山田の妙見町に來り、藤屋といふへ一緒に泊る、彌次郎は湯に入りに行く北八髭を剃掛けて一時に髪結さん、俺が髪はぐつと根を詰めて結つてくんな、何だか此地の方の髪は、髷が出て鬚が乙に長くて、飛んだ氣の利かねへ頭付だ、そして女の髪も豪勢に大きく結つて、何の事はねえ筑摩の鍋被りといふものだ「髪結」その代り女子はとつとえらい綺麗でおましよがな」北八「綺麗はい、が立つて小便するにはあやまる「髪結」イヤ江戸の女中も、大きな口を開かんして欠伸さんすには、ねから色氣が醒めるがな」北八「もうそこはい、から、ぐつと髪を詰めて結つてくんな「髪結」ハイ、根はこないでようおますかい」北八「イヤ、もつと引詰めてくんな、兎角此方の方へ來ると髪は下手糞だ、根を固くつめて

結ふ事を知らねへ「髪結」さよならこれではどうでおます」と髪結、これ見たかと云ふ程ぐつと根をつめると、月代に三つほど鬘が出来て、目は上方の方に引釣る位に堅く引詰められ、北八髪の中のぬけるほど痛けれども負け惜みにて顔をしかめ乍ら「これでよし、ア、好い心持だ、餘りよすぎて頭が廻らぬ」其内彌次郎も湯より上り来る、髪結も出て行く、女膳を持ち出す、上方者も起直る北八「彌次さん、俺の箸は何處にある、どうも俯向くことがならねへ、餘り髪結奴が剛氣に根を詰めて結やアがつて、アイタ、首を動かす度にめりくと髪の毛が脱けるやうだ」



籤井竹庵

上方者は邊栗屋與太九郎といつて京都の人なり、
此與太九郎の案内にて、古市遊興の一條あれど省
く、やがて、内宮外宮に參拜を果し、天の岩戸に
登りたるに彌次郎如何しけん、頻りに腹痛を覺え
耐へ難ければ、急ぎ廣小路に至り宿を求め、北八
に介抱せられ座敷に通る亭主「嚙御難儀でおまし
よ、幸ひ私所の妻が今月臨月でおますがな、昨
日からちと優れまけんので今醫者様を呼びに參じ
たが貴客も見てお貰ひなさらんかいな「彌次」どう
ぞお頼み申しやす」と云ひ乍らも「アイタ、ハ、ハ、
無上に腹が鳴る、雪陣は何處にノ」と騒ぎ乍ら
漸々の事に立上り用達に行く、其内近所の醫者の
弟子と見ゆる坊様「エヘン、ドレお脈を」と
北八の側へ座り、北八の脈を見やうとする。北八
「イヤ俺では御座りませぬ」醫者「ハテ達者の人の

脈みやくから見比みくらべねば、病人びやうじんの脈みやくが分わからんわいの」と
北八きたはちの脈みやくを取り、暫しばらく考かんがへ「ハ、ア成程なるほど、貴様きさま
何なんともないやうぢや、氣遣きつかひない最早もはやお暇いとま致いたさう」
北八きたはち「モシ／＼病人びやうじんを御覽ごらんじて下さりませ」醫者いしや
「ほんにさうであつた、病人びやうじんは何處どこにごさる」北
八きたはち「ハイ只今ただいま、雪陣ゆきじんに参り居まゐります、コレ／＼彌次やじ
さん、お醫者様いしやさまがござつた。早く出でなせへ／＼」
と大きな聲こゑをすれば、彌次郎やじらう雪陣ゆきじんの中なかより「イヤ
まだ出でられぬ、お醫者様いしやさまどうぞこれへお出いで下くだ
りませ」



どつちも安産

彌次郎漸々雪陣より出づれば醫者脈を見て「ハ、ア貴公はコリヤ血の道ぢやわいの、兎角臨月までには起るものぢや」彌次「イヤ私孕んだ覚えはござりませぬ」醫者「ナニ懐胎ではない、ハテ面妖な、イヤコリヤ俺が師匠が悪い、廣小路の伊賀越屋から呼に起したが、彼處の病人は産月ぢやさかい、大方血の道が起つたのぢやある、其積で藥を盛るがよいと教へて越したが、そりや貴公のことではなかつたわいの」北八「さやう、血の道は此處の内儀のことですござりませう」醫者「左様ぢや、コリヤ俺が間違ひぢやわいの、一體貴様は何病ぢや」彌次「私は先刻から蟲がかぶつてなりませぬ」其内勝手の方俄かに騒がしく亭主「コリヤく産婆殿へ人を遣れ、ソレ湯を沸せ」と騒ぎ立つ内、此方には彌次郎が頻りに腹痛み出し、「アイタ、ゝゝ」醫

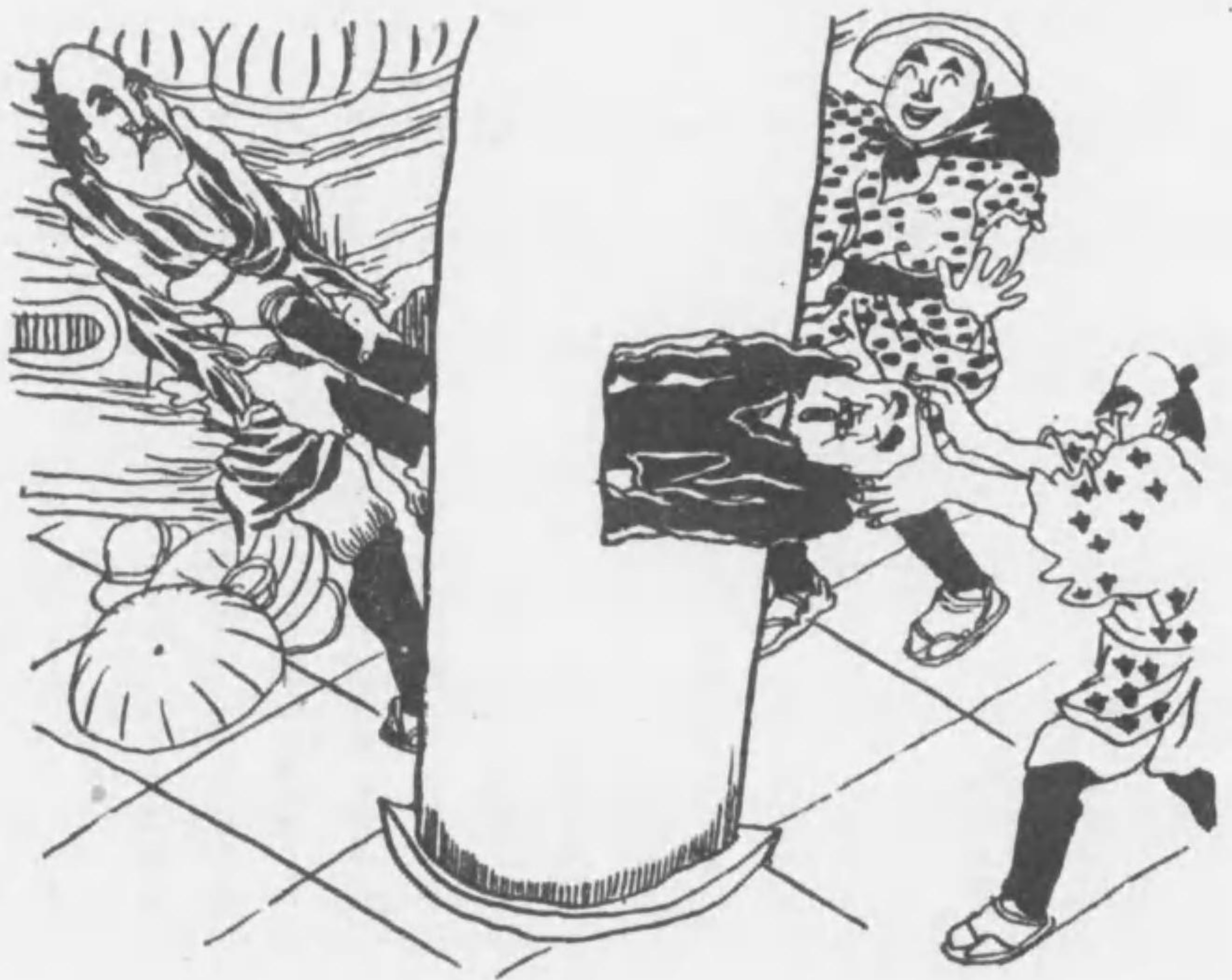
者「コリヤ堪らん／＼、病人の側には居られぬ」と
匆々逃げ出して歸ると、彌次郎が布團被つて寢て
ゐる處へ、産婆慌て、入り來り、「寢て居てはなら
んわいの、サア／＼おきさんせ／＼」とうろたへ
乍ら、北八をせきたて、彌次郎の腰を抱かせ「さ
あぐつと息まんせ／＼」彌次郎「此處で息んで堪る
ものか、雪陣へ行きてへ放した／＼」婆「イヤ高架
へ往てはならんわいのそりや息まんせ／＼」か、
る騒の最中、勝手の方には女房の安産と見えて、
「オギヤア／＼／＼」婆「そりやこそ生れた、
イヤ此所ではない、何處ぢや／＼」其内彌次郎も
雪陣にかけ込みてめでたし／＼。



大佛の柱

大佛殿方廣寺、本尊は盧舍那佛の座像、御丈六丈三尺、堂は東西二十七間、南北四十五間あり、彌次郎、北八茲に法施し奉りて彌次「あのこうして御座る御手の掌へ疊が八疊敷けるけな」北八「狸の金玉と同じ事だな」彌次「勿體ねへ事をいふもんだそしてアノお鼻の穴からは人が傘をさして出らるゝと」北八「オヤ／＼アレ皆が柱の穴を潜つてゐるは」彌次「ほんに這奴は奇妙／＼」此御堂の柱の下には丁度人の潜る丈切抜きし穴あり、田舎道者共戯れにこれを潜り脱ける、北八同じく潜り、「コリヤ面白へ、併し彌次さんは肥つてゐるから脱られめへ」彌次「俺だとしてナニこれが」と北八を引除け、四這になつて柱の穴へ、軀半分程這入り掛け、一向に脱られず、あとへ戻らうとするに、脇差の鐙が横腹に支へて痛み堪へられず、彌次郎顔を

眞赤になし、「アイタ、ハ、コリヤひよんな事をした、コレ手を引張ッてくりや」北八「ハ、ハ、這奴は可笑い」と彌次の兩手をぐつと引張る彌次「アイタ、ハ、ハ、」仲々脱けぬ故今度は後へ廻り兩の足を捉へ、やあえんさア〜彌次「あいた〜」矢張り脱けぬ、前へ廻つたり、後へ廻つたり、引出しては引戻し、何時迄も結局がない、其内脇差の鑄に氣がつき北八、彌次の横腹へ手を差入れて捻くり廻し漸々脇差を抜いて取り、參詣の人にも手傳つて貰ひ北八「メたぞえんやア〜ソリヤ出たぞ出たぞ」とやう〜引出す。彌次郎痛かつたと見え助骨を押へ乍ら涙をボロリ〜。



京の喧嘩

三十三間堂より此御門前を北へ指して行くに、俄かに往來騒ぎ立ちて、老若うち混り、走り行く、彌次「もしく、何で御座いやすね」向より來る人「彼處に豪い喧嘩があるわいの」北八「京の喧嘩も珍らしからう」と足早に行きて見るに、見物山の如く、往來もならぬ位なるに、二人は押分けく、て是れを見れば、彼の喧嘩の一人は肴屋、相手は職人體の男、いづれ屈強の壯俊なり、されど都は人の心も悠長にして、喧嘩と見ゆれど、さのみあたまたまから叩合もせず、日當のよき處に二人向ひ合はせて肴屋「コレイノ、わが身の方から行當り腐つて、其様なこと云ふもんぢやないわい、汝腦天打いてこまそかい」相手職人「措きくされ此方様が手の動くのに、此方黙としてるやせんわい」と言ひつ、手拭を叮嚀に折りて、鉢巻をする肴屋「よ

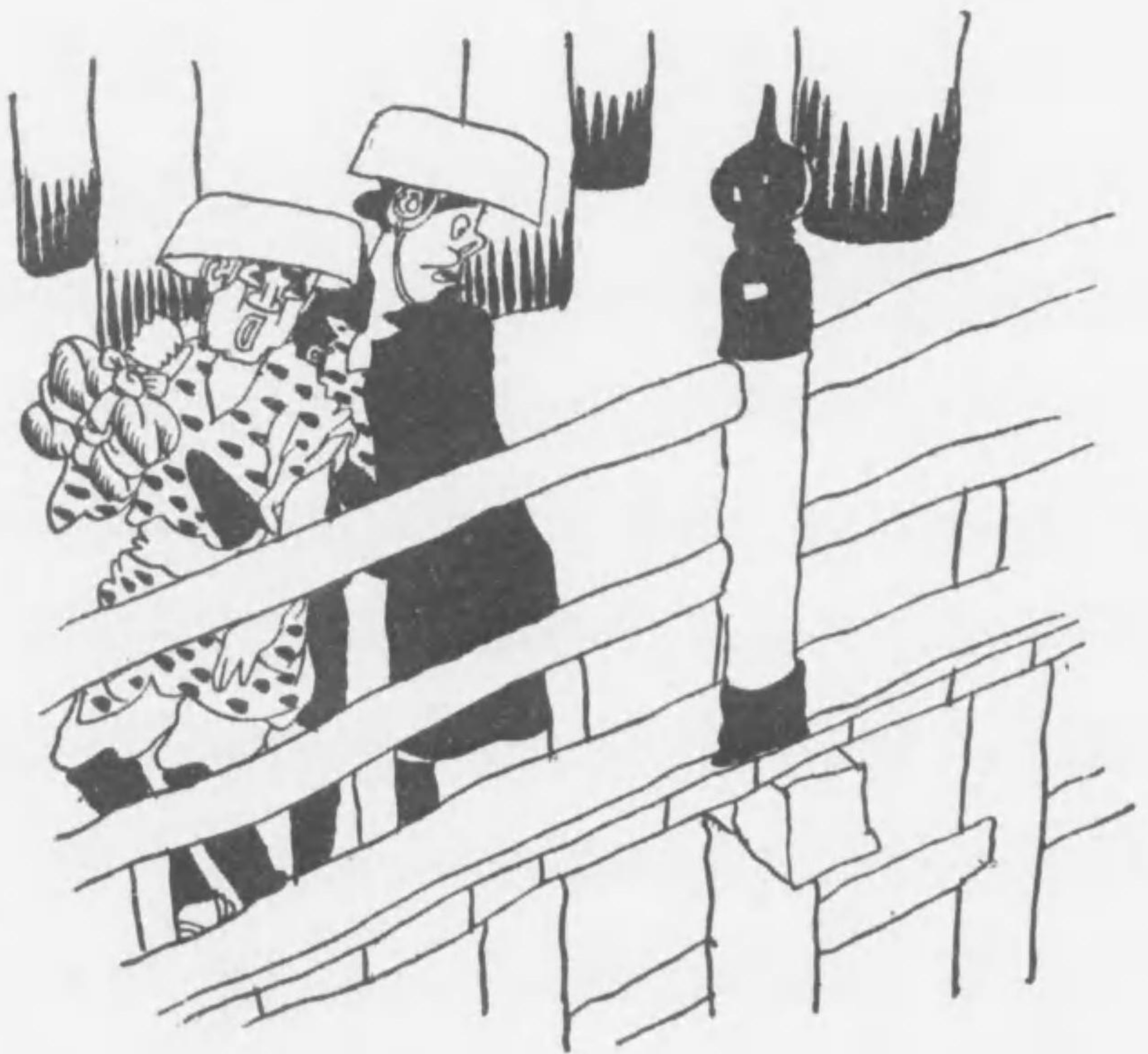
「顔鳴らす和郎ぢやな、一體汝や何處の者ぢやい」
職人「俺がい、俺や堀川姉ヶ小路下る處ぢやわい」
肴屋「名は何と云ふぞい」職人「喜兵衛といふわい」
肴屋「年は何歳ぢや」職人「二十四ぢやわい」肴屋
「措きくされ、汝二十四にしちや、ゑらう若い、
嘘吐き腐るな、見物の人欠伸し乍ら「十兵衛さん
もう往のかい」十兵衛「待たんせ今に打合ふぢやあ
ろ」見物「イヤ俺や家に客ほつて置いて来たさか
い」十兵衛「そしたら其お客連れてこんせ、序に薄
縁なと一枚くさんせんかい」と氣の長い者計り、
悠々と見物してゐる。



百 萬 遍

此處は清水寺、本堂は十一面千手観音なり、傍の小高き處に机を控へたる老僧、參詣を見掛けて、「當山觀世音の御影はこれから出ますぞ、誠に靈驗あらたなる事は、盲目が物言ひ、啞の耳が聞え歩いて來た躰が直る、誰方も戴いてお歸りなされ冥加錢は澤山に御心持次第、御信心の方は御座りませぬか」北八「よく饒舌る坊主奴だ、時に彌次さん、彼の噂に聞いた傘をさして飛ぶといふは此舞臺からだな」僧「昔から當寺へ立願の方は、佛に誓ふて是から下へ飛ばれるが、怪我せんのが有難い所ぢやわいな」北八「折々は飛ぶ人がありやすかね」僧「左様、えては氣の狂れた和郎達が來て飛びをるがな、此間も若い女中が飛ばれたわいな」北八「ハア飛んでどうしやした」僧「飛んで落ちたわいな」北八「落ちてそれからどうしたね」僧「ハテ根

問する和郎ぢや、此女中は罪障が深いさかい、佛の罰で目を廻したわいな「北八」鼻は廻さなんだかね、それで氣がつきやしたか「僧」氣が付いて往んだわいな「北八」往んでどうしたね「僧」さてく執拗い人ぢや、それ聞いて何さんすぞい「北八」イヤ俺が癖として、聞掛けた事は金輪際聞いてしまはねば、氣が済まぬ「僧」それなら言ふて聞かそかい夫から其女中は俄かに氣が違つたわいの「北八」ハテナ氣が狂ッてどうしやしたね「僧」百萬遍を始めたわいの「北八」それから「僧」鉦を叩いて「北八」それから「僧」南無阿彌陀ん佛「北八」それから「僧」南無阿彌陀佛「北八」コレサ百萬遍の後は、どうしやした「僧」南無阿彌陀ん佛、くくくくくく」



大根小便しょく

斯くて其日(そのひ)もはや七ツ頃(ごころ)と覺(わか)しければ、急ぎ三條(さんじょう)に宿(やど)を取らんと、道(みち)を早め行く向(むか)ふより小便擔(せうべんだん)と大根(だいこん)を荷(に)ひたる男(をとこ)、「大根小便(だいこんせうべん)しょくく」北八(きたはち)「ハ、あれが彼の(かの)、大根(だいこん)と小便(せうべん)と取替(とりか)へにするのだらう」肥取(かま)「大きな大根(だいこん)と、小便(せうべん)しょくく」と呼(よ)んで行く此方(こなた)より、お仲間(ちまげん)らしき卑陋(しみたれ)の男(をとこ)二人(ふたり)、「コリヤく俺等(われら)二人(ふたり)が此處(こゝ)で小便(せうべん)してやるが、其大根(そのだいこん)三本(さんぼん)おくんさんかいな」肥取(かま)「まあこち來(き)てして見(み)さんせ」と此所(こゝ)の辻子(つじこ)へ二人(ふたり)を連(つ)れて行く、辻子(つじこ)は江戸(えど)で云(い)ふ新道(しんみち)なり、彌次郎(やじらう)北八(きたはち)是(こゝ)を見て、如何(どう)するの(のだ)知らんと跡(あと)よりついて行き、立止(たちど)まり見(み)れば二人(ふたり)が小便(せうべん)してしまふと、肥取桶(かまぶち)をかたけ見(み)て「もう是(こゝ)限りで出(で)んのかいな」仲間(ちまげん)「打止(うちど)に屁(へ)が出(で)たから、もう小便(せうべん)は是(こゝ)切(き)ちやわいな」肥取(かま)「コリヤあかんわい、今(いま)一度(いちど)身(み)體(たい)を振(ふ)ッて見(み)さんせい、

これぢや大根三本はようやらんわいな、二本もて
行かんせ」仲間「ハテ喧しう言はんすな、家へもて
いで水交りや、三升ばかりにやなるぞいな、早
う三本くさんせく」と遣つ、返しつ言ふて居る
を二人は可笑く見て居たりしが、北八「幸ひ俺が
小便、無様ながらお前方に上げませう、是を足し
て大根三本とりなせへ」仲間「お志はお忝なう御
座りますが、夫では御氣の毒様ぢやわいな」北八
「ハテ宜いわな、どうせ俺も有合せたもんだから、
あまり輕少なれど」仲間「左様なればお小便戴きま
せうかいな」



都女郎

向ふの方より被衣を著たる女の二三人連、流石都
女郎の風俗婀娜にて、何れも色白く、透徹る計り
の代物、北八腰をぬかして北八「ヒヤアノ、生き
た女が来る、奇麗く、あの美しい奴と、俺が物
を言ッて見せやうか」とやがて彼女中の側へ走り
行きて、「モシちと物がお尋ね申したい、これから
三條へはどう参りやすね」と聞くに、此女中御所
方と見えて、飛んだ横柄なり、「汝三條へ行きやる
なら、此通りをさがりやると、石垣といふ所へ出
やる程に、夫を左へ行きやると、ツイ三條の橋ち
やわいな」と一體御所方の女中は、人を何とも思
はず、ちと利いた風の男と見ると、悪く冷かす風
ゆゑ、五條の橋を三條と教ふる北八「ハイ是は有
難うござりやす」と何も知らねば禮を言つて、そ
の教へられたる道筋を三條へ行くとのみ心得、早

くも五條の橋に至りし頃は早日暮れて往來の人、
「モシ鹿谷の方へはどう参りますな」北八「汝鹿谷
へ行きやるなら此通りを直に行きやると、ツイ鹿
谷へ出やる程に、ソレ轉んだら起きていきや」往
來の人「イヤ這奴、ぞんざいな物のぬかしやうぢや
此所なあんだらめが、頭にやしてこまそかい」と
此男の連と見えたるが二三人立掛るを見ればいづ
れも見上ぐるやうな角力取らしき者共なれば北八
忽ち悄氣返り、「ハイ御免なせへ」角力「いや了簡な
らんわい、汝等達は何處ぢやぞい」彌次「これから
此三條に宿を取らうといふのでござりやす」角力
「何ぬかすぞい、此處は五條の橋ぢやわい」彌次
「やッ此處は三條では御座りやせぬかソレ見や北
八、先刻の女共がとんだすつばかしの教えやがッ
た」



酒と茶

四條通に出づれば、名にし負ふ川東の牛粹、祇園町の繁盛は、兩側の芝居櫓太鼓を打交へ、てんからくの音勇ましく、狂言の名代看板華やかに、對の派手模様著飾りたる、東西の木戸番鹽辛聲にて、「サア評判ちやく〜「北八」ナント彌次さん京の芝居も一切見やうぢやアねへか」彌次「面白からう」と引連れて芝居へ這入り二階にあがると棧敷番來り、二人を向う棧敷の前側へ入れる、隣棧敷の見物、太郎兵衛「イヤ時に權兵衛さん一盃やろかいな」と小さな猪口を取出し、風呂敷に包みし徳利より注いで呑む、北八是を見て小聲になり、「彌次さん見ねへ、甘さうに飲みをるが羨やましい」彌次「エ、忌々しいことを言ふ男だ」北八「コレお坊さんお饅一つ上げやせう」と己が食ひ残した饅頭一つ、隣座敷の子供にやる、是にて脚をつけて

酒を呑まうといふ下心なり、太郎兵衛「これはお有難う御座りますわいな」北八「お前方ア好い物をあがりなさる」太郎兵衛「お前も御酒は好きかいな」北八「左様、飯よりは好物さ」太郎兵衛「そりやよいお楽しみぢやわいな、權兵衛さん、もう一つ戴かうかいな、オト、、、、、コリヤ好い酒ぢやな」權兵衛「さよぢや、ホンニお隣のお客御退屈ぢやある是なと一つあがらんかいな」と茶碗を差出す、北八手にとるよりはやく戴きて、「ハイ有難う御座りやす」ついで太郎兵衛、茶屋の土瓶を北八に渡す、北八勿怪な顔して請取り、注いで呑めばぬるい茶なり北八「エ、茶ださうなベツベ〜」



大根！盲録！

此内幕の内にて太鼓「てんく〜てれつくてんく〜」
拍子木「カツチ〜カチ〜」：「三味」ツ、テン
く〜く〜」幕開くと花道より、仕出の役者大勢出
ると、見物の悪口、「イヨ大根ウ、十把ひとからけ
ぢや」北八「なに大根とは、アノ役者の事か、何の
こった」見物「ヨウでけますの」北八「有難てへと申
しやす」と此北八至つて芝居好故、幕が明くと夢中
になり、何も彼も打忘れて、無上に大きな聲して
賞める故、見物皆々可笑がり、北八の方を見てゐ
ると北八「ヨウ大根め〜」此大根といふ事は、
上方にては役者の下手なものを大根といふ、北八
其譯は知らず、利いた風に役者さへ見ると大根大
根と呼立つるを見物北八を小馬鹿にして「ヨウ盲
録さまア」と北八を笑ふ、又北八盲録の譯を知ら
ねば北八「彌次さん聞いたか此方の役者には、い

大根！盲録！

一三〇

ろくの偏痴氣な名がある、大根だの盲録だのとよもや俳名ぢやアあるめへ「彌次」大方役者の仇名だらう「北八」そんなら、今出た役者が盲録だな、ヨウく、盲録ありがていぞ」と云ふと見物にとつと落がきて、狂言を見ずに北八の方計り見て、どつくと笑ひ乍ら、イヤ向棧敷の盲録様、大でけく「見物「阿房よく向棧敷の盲録の阿房ヤア」これでやつと気がついた北八「イヤ這奴等は太へ奴等」と無上に力む、見物皆々騒ぎ立つ、喧嘩よくと大騒動となる、棧敷番四五人來り、北八彌次郎兩人をやみくもに引提へ引出す、二人小言たらく芝居を出て祇園町の方へ北八「エ、業晒しな、ハ、ハ、」



二 軒茶屋

夫より祇園の社にまゐり、南の方樓門を出ると二軒茶屋豆腐田樂の名物なり、彌次「ハ、ア此處が川柳點に「豆腐切る顔に祇園の人だから」と云つた所だな、イヤ時に此所で一杯やらかしはどうだ、ちと腹が北野の御神木だ」女「さあ奥へお這入りなされ」と此内兩人奥へ通る、北八「田樂で飯にしやう酒も少し」女「ハイ」彌次「京では何でも他國者と見ると途方もなく高く取るといふ事だから、油膽はならぬ」と云ふ所へ女盃を持出で、口取に菜の浸物、井に入れ持出す、彌次「モシ女中、此井はいくら」女「それかいな五分で御座りますわいな」彌次郎思惑あり段々肴を出す毎に其値段を聞きて、出た丈のもの悉く食ひしまひて、彌次「さあ、女中勘定を頼みます」女「ハイそれへ」と書附を持ち來る、北八「オヤ、十二匁五分たア豪勢高

へく「彌次」イ、ヤ安いものだ、サア北八荷物が
出来た、これを皆もって歸るのだけ」と大平、井の
尖を皆鼻紙にて拭き、風呂敷に包まうとする故、
女臈を漬して色々に辯解すれども彌次郎、仲々承
知せず、雙方遣つ、返しついで處へ前垂した男勝
手より出で「ハイ貴方の御尤宜ござります、お持
なされませ、其代りお肴の代はまだ戴きませんわ
いな、それはハイ七十八匁五分、彌次郎其高いの
に目のくり玉を飛ばし「途方もねへ」と云つたが
これも上方者と侮つて却つて一本見事にしてやら
れた譯なり。



女商人

日も早七ツ下りとなれば、急ぎ三條に宿を求めんと辿り行く先に立ちて、近在の女商人、何れも頭に柴薪或は梯子連木、槌杯を戴きて、四五人打連立ち、「梯子買はしやせんかいにやア」、「連木いらんかいにやア」と行々きて河原に出ると女共各々爰に荷を下し、摺火打にて責などのみて休む、彌次郎よせばよいに、「ちと冷かしてやらうか」など、煙草を出し、女商人の側へ寄り、「御無心乍ら火を一つ、パツパツくく、時にお前方ア飛んだ重てへものを、よく頭へ載せて歩きなさるの」女「さよちやわいな、お前さん方ア、どうぞ此連木買うておくれんかいな」彌次「ナニ連木か、ア、買いていが、こりや細い」女「アノ連木お厭なら、梯子買ふておくれんかいな」彌次「ハ、ハ、梯子面白へ、いくらだ」女「六匁下んせ」彌次「二百計なら引受け

やうさ「女」よいわいな、是持て歸んだら呵られやう、二百に負けてあぎよわいな「彌次」ヤア負けるか情ないことをいふ「女」氣味う安いもんぢやわいな「彌次」いくら安くつても梯子買ふてどうするものだ、内もねへ癖に「女」よいわいな、サア持ていなんせ」と女共四五人口々喧しくしやべり立ちて彌次郎を中に取巻き責め立つる、總て此女商人は皆至つて氣の強きもの故、なか／＼合點せず、物見高い京の人達、何事やらんとぐるど取巻くに、彌次郎逃げられもせず、大きに困り果て、詮方なく錢二百文出してやり、とう／＼梯子を買取り、

彌次「又一番凹んだ、業腹な」



じやうもんが行く

斯くて四條通を寺町へ下りて行く道にも、梯子の
持重りして、呟き乍ら、「なんと北八、手前附合を
知らぬものだ、ちツとばかり持つてくれろい」北
八「如何さま、氣の毒なこつた、嘸重たかろ、かう
しなせへ、アノ女共のやうに頭へ載けて持つて見
なせへ 彌次「成程々々」と手拭を疊み、頭へ載せ
其上へ梯子を載せ、両手に持ち添へ行くと、往來
の人「こりや何ぢやいな、浮雲てならんわいな」彌
次「向ふがさつぱり見えねへで歩かれぬ」往來の人
「コリヤじやうもんが行くさうぢや、水持て出や
しやんせんかいな、」じやうもんが行くとは、火事
があるさうなといふ事なり」往來「何處にじやうも
んが行くぞいな、」あれ彼處へ、梯子もて行くわい
な、阿房よく」彌次「何ぬかしやアがる」往來「腐
抜な和郎ぢやハ、、、」彌次「イヤ此籠棒奴等」と

じやうもんが行く



じやらもんが行く

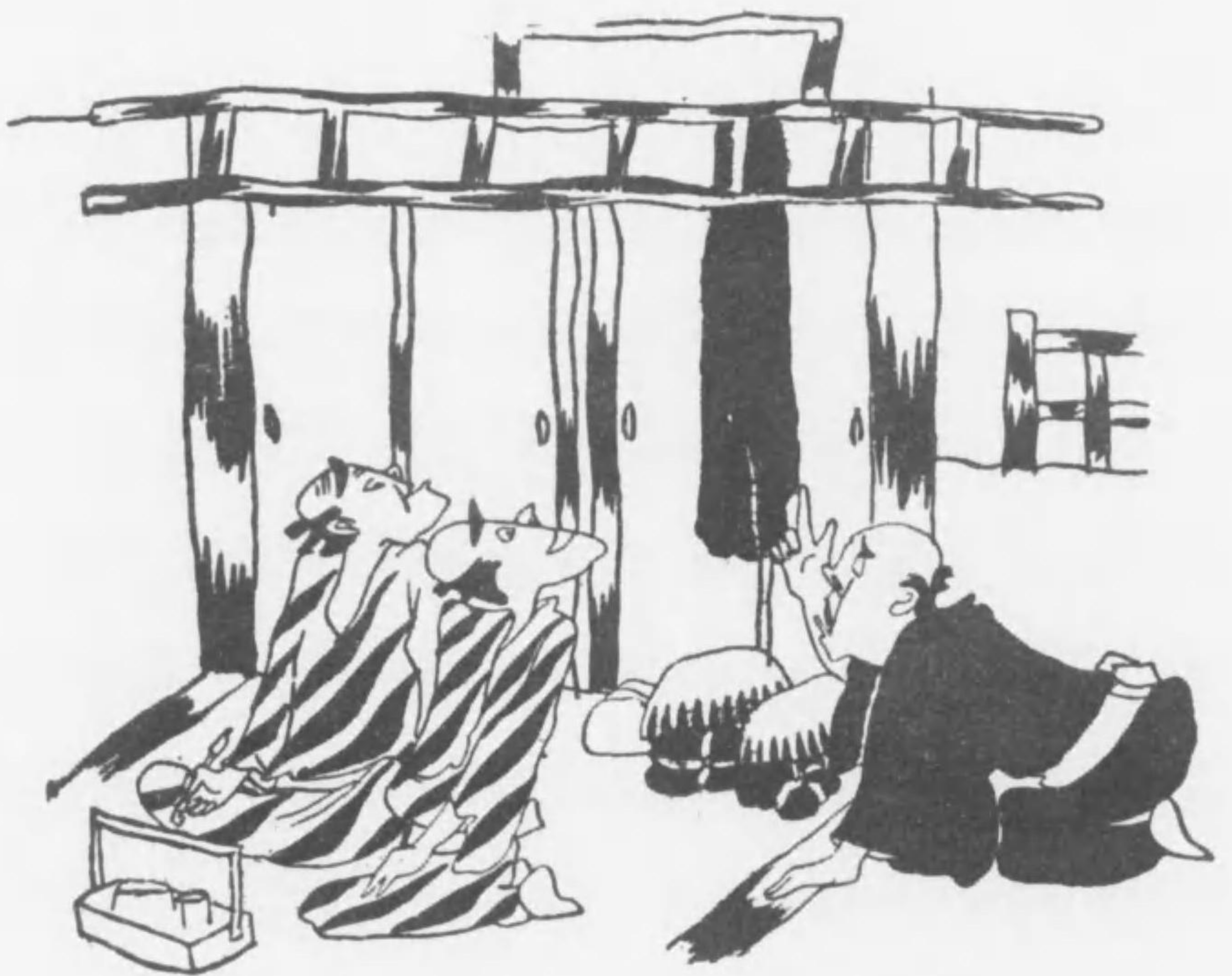
一三六

梯子を頭へ載せたなりに、ぐつと振返れば、彼梯子、跡先にて、往來の人の頭をこつとり往來「アイタ、、、、何ぢやい度滅相な、此人中で長い物横たはしにしくさつて、ゑらい馬鹿ぢやな、天窓どやいてこませやい」彌次「ナニ噓言ぬかしやアが」往來「わしが額の痰瘤がなうなつた、其處にや無いか見て下んせ」彌次「エ、俺が知るものか、馬鹿つ面な」往來「豪い顔な和郎ぢや、叩んでこませやい」と何れも聞かぬ氣の者と見えて、大勢どやくと立掛れば、北八止めて、「コリヤア此方が悪かつた、誰方も御了簡くださりませ」

梯子の手紙

厄介物の梯子を打捨て行かんと、往來少なき横町へ這入り、そつと捨て置き逃げんとすれば、折悪しく人に見つけられて咎められ、詮方なく擔ぎあるき、又何方へ捨てんくと思ふうち浮々と三條通に來りけるほどに、宿引の誘ふま、宿に著く事は著きたれど、亭主に梯子の事を聞かれ彌次郎グツとつまツたが横合から、ふと出來た北八の洒落「イヤ是には譯がありやす」と出駄良目なる一條の物語り、…「アリヤ江戸からことづかつて來やしたのさ」亭主「ソリヤ何として、彼様なものを」北八「聞きなせへ、俺等が心安い者だが、生れは此の京の人で、今江戸に世帯を持つてるやす、所へ京の親許の方から、遙々とアノ梯子を擔がせて寄越しやした、其譯は、彼の親御が無筆といふ事で、人に手紙を書いて貰ふも面目ねへと云ふ事か

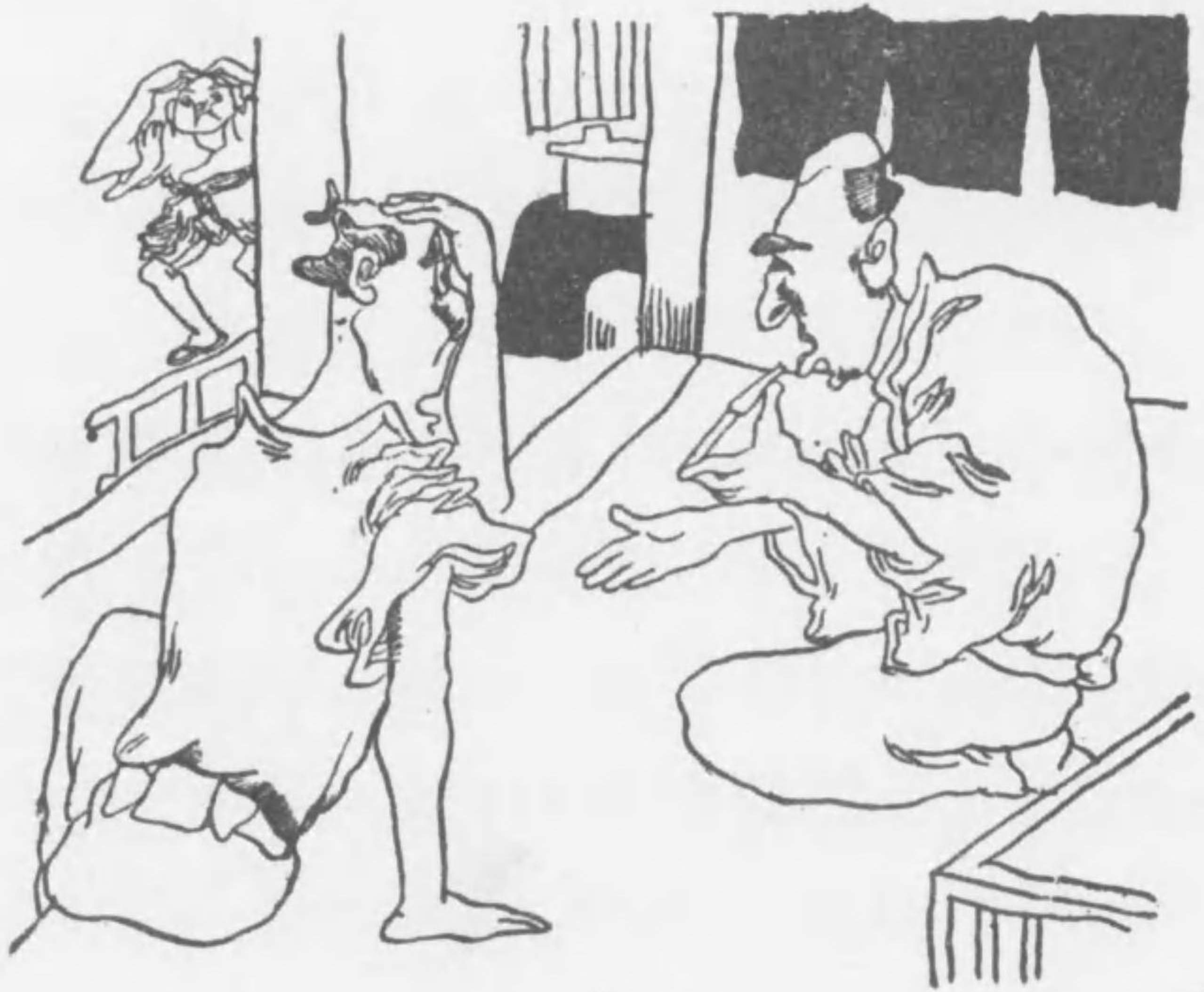
して、あの梯子許り寄越した心は、登ッて来いといふ心意氣で御座りませう、其處で又息子が返事を寄越してへが、同じくこれも無筆で、俺等が今度御當地へ来ると言つたら、幸ひ依頼けてへ物があると言ふに依つて、随分何でも届けてやらうと云ひやしたら汚ねへ乞食坊主一人とアノ梯子を寄越して、是を親爺の方へ届けて呉ると云ひやす、そして、其坊様に撞木ばかり持たして、登りたいが金がないといふ返事の代りだとは、御亭主、聞えやしたかアハ、ハ、ハ、



邊栗屋與太九郎訪問

又彼の梯子を打擔ぎ、三條の宿を出でたる兩人、
北八「なんと今日はどツちの方へまごつくのだ」
彌次「マア今日は北野の天神様へ行きやせう」北
八「時に思ひ出した事がある、ソレ伊勢の古市で一
座した邊栗屋の與太九郎の家は慥に千本通中立賣
とやら云つたが、北野の天神様へ行く道だと言つ
たぢやアねへか」彌次「ソレ〜其奴が所へたづね
て行ツて、酒でも呑んでやらうぢやアねへか」北
八「ナニ吝嗇なすびが呑ませるものか」彌次「所が
俺等が術にかけて呑倒さう」と意氣込み、やうや
う訪ね當てたるはよけれど、與太九郎「こりや珍し
い、ようお上りじやわいな、時に何もお愛相がな
い、お支度はどうぢやわいな」彌次「アイ今朝、宿屋
で食べたまゝ、中食はまだ致しやせん」與太「そり
やお樂しみぢやわいな、酒などあけたいが、此邊

に酒屋はなし「北八」酒屋は真にお隣にあるぢやア
 ねへか「與太」イヤ彼處では、小賣は致しませんわ
 いな、お前方最少と先きへよつてお出でなさると
 桂川の若鮎、生きてをるのを魚田にすると根から
 葉から甘い何のと、いふやうなこつちやないわ
 いな、イヤまだ四條の生洲が近いとお供して行も
 のホンニそれより又秋にお出でなさると、當所名
 物の松茸ぢや」など、御馳走の話許り聞かせられ
 た上に古市の勘定の残りぢやとて、二百四十八匁
 與太九郎にせしめられ、彌次「忌々敷目に逢つた、
 錢二百唯取られに寄つたやうなものだ」と膨れ面



馬の横腹

天満宮社内へ掛る道に、菜飯田樂を賣る茶屋夥しくあり、赤前垂の女軒に出で、頻りに客を呼ぶ彌次郎「モシ〜俺等ア天神様へ參詣して、歸りにお前の處で休みやせうから、此梯子を此處へ置いてくんせへ」茶屋「ハイお預り申しましたわいな」彌次「お頼み申しやす」と梯子を茶屋の門に立掛けて置き、行過ぎて「ヤ〜〜重荷おろした、何の歸りに寄るものか」北八「こりや大出来〜」など、兩人漸くの事で厄介な梯子を捨てたつもりで大よろこび、右近の馬場に馬の稽古を見物し、天満宮にも參詣を終りて、歸らうとしたるが、東の門より一條通に出づる道を知らず、浮々と元來し門を出でたるに思はず彼の梯子を預けたる茶屋の門近くなれば、彌次郎心附きて「待て〜梯子が矢張立掛けてある」北八「成程、ひよつと見附か

つたら梯子持つて行けといふだらうしといつて又後へ戻るも業腹、何ぞよい智恵は……」と立止つて思案してゐる内、馬場の借馬一疋、傳勞が牽いて来るを見るより、兩人其馬の横腹の方にくついて姿を隠し、茶屋の前を通らうとしたはよいが生憎も生憎、茶屋の前で馬の奴、立止まつて動かない、詮方なく兩人も横腹にくつついた儘立止ると、馬の奴小便をシャア／＼兩人共飛沫をうけて「エ、情ない目に逢ふものだ」と飛びのけば、向ふの茶屋の門先に居た女が目早く見附けて、「モシナ此方で御座ります」ソリヤ大變と兩人一目散に逃げ出す。



按摩の大當り

彼の彌次郎兵衛北八なる者、伏見の晝舟に途中より飛乗して、早くも大阪の八軒屋に至り爰より舟を上りて、長町をさして行くほどに境筋通を南に日本橋へ出でたりければ、宿引共此處に居合はせ兩人を見かけて宿の相談をしかくるに、早速極まり、すぐさま此長町の分銅河内屋といふにぞ連れ行きける、此宿は當所隨一の大家にして、およそ間數七八十もありといへり、兩人は奥の六疊ばかりある小座敷へ通される。外に一人の台宿あり、そは丹波の人なり、丹波の人「コリヤ和郎達は何處から來りました」北八「俺等ア江戸で御座りやす」と挨拶もそこく旅は道連世は情け、一緒に飯も食ひ、湯へも這入りてしまふ、そこへ女按摩、厭らしき風にて撈りく來る、「お療治はよござりますかいな」北八「お前さつぱり目が見えやせんか、

見ると此内に飛んだ色男が居るに、見せてへな
 ア「按摩」そぢやあろぞいな「彌次」ナント按摩さん
 此男より俺がい、男か、さうして年はどつちが若
 へ、當つたら二人ながら揉んで貰ひやせう」按摩
 「そりや直に當てるわいな」北八「こりや面白へ、
 サア俺は幾歳位だ」按摩「コーツとお前さんは二十
 三四」北八「男はい、男だらうね」按摩「左様ぢや、
 お目がえらいいかついお目ぢやあろがな、そして
 お鼻が：：かう言ふたら、お腹が立とか知らんが
 確かに獅子まひ鼻ぢやあろぞいな」彌次「コリヤ按
 摩さん、大當りだ、さあ約束通り揉んでやりな
 く」



夢中作左衛門

按摩北八の後に廻り揉みにかゝると、此内女の菓子賣、箱を重ねて持ち來り、「ようお泊りぢやわいな、菓子買うておくれんかへ」北八「ヒヤア段々と出て來るは、なか〜い、菓子だぞ」菓子賣「どれ〜茶々汲んで參じやうかへ」と菓子箱をつき出し置いて、勝手へ行くと北八、彌次郎に目配せしで、そつと菓子の箱の下に重ねてある箱より、何やら四ツ五ツ取り出し、後へちやつと隠すと、彼按摩手を出して、其菓子をひつたくり袂へ入る、を北八一向に知らず、彌次郎も同様菓子五ツ六ツ取出すに、勝手より人音するゆゑ、ちやつと箱は元の如く重ねて置き、かの菓子は後の方へ隠すを按摩取り之れをもそつとせしめて袂に入る、と彌次郎も一向に夢中作左衛門なり、此内菓子賣の女茶を汲み持ち來る、彌次「是れは幾錢だ」菓子賣「ハ

イ四文づ、ぢやわいな、そりや不味い、此方あが
ツて見なされ」と並べ立て、勸むるに、彌次郎も
北八も丹波の人も、各自に取つてくらひ、後で勘
定を聞けば、一人五十づ、北八「ナニ五十づ、か
コリヤ高いく」と云つたが跡では是非がない、
菓子賣も按摩も、用事がすめば、さつさと起つて
行く、彌次「上方の女にやア油断がならねへ、しか
し菓子賣奴が、俺等をい、やうにしたと思つてけ
つかるであらうが、さうは虎の皮」と云ひ乍ら後
を探すに先刻の菓子見えす、北八も同じく爰に置
いた筈だが……。



菓子源四郎

兩人折角の菓子の行違が知れず、當が外れて、ケ
ロリとしてゐる處へ、女布團を引摺り來り、投り
込んで行くを見れば、矢張今の按摩取なり、皆肝
を潰し、若し女中、今其處へ來た女は、先刻の按
摩ぢやアねへかの「女」さやうぢやわいな「彌次」ど
うして目が見える「女」ありやお客さん方へ出るに
目明ではお心置があつて悪いさかい、お座敷へは
あないに目の見えん振して出てぢやわいな「北八
」ヤア扱は、俺が事をよく當てた筈だ、目が見え
るものを「彌次」そんなら、俺がものしたものも
のしやあがつたに違はねへ「女」オ、可笑、お前さ
ん方の源四郎してぢや菓子ぢやて、妾もこない
に貰ひましたわいな」と袂より出して見せ、打笑
ひ勝手へ行く、北八「大笑ひく」彌次「一杯食つた
ろくく」に按摩はとらず菓子までも

ここに目のないゆゑにとられた
それより三人打臥したるに丹波の人は早先きに高
軒なり彌次「餘り寝られねへからこれ見や、足で
斯様物を掻きよせたは」と夜著の中から小さな物
物を取出して見せる北八「そりや、先刻あの人
出した砂糖漬」彌次「シツ聲が高い」北八「コウ一
よこしねへ」彌次「待て〜」と闇の中にて彼の曲
物の蓋を取り、一つ摘んで口にかツちり北八も、
「ドレ〜」と曲物を引取り之れも摘んで口にぐし
やり、にちやく〜、此曲物は丹波の人が高野山へ
納めやうと持つて来た、女房のお骨を入れしもの
なり。



二軒前の雪陣 (其一)

モシ酒屋へはどう参ります

彌次郎北八は二三日逗留の積、今日は爰許の名所
一見せんと、案内の佐平次を頼み出掛ける、先高
津のお宮に詣りて後、谷町通に出でたるに、何と
やら腹淋しくなりたれば、幸と居酒屋めきたる店
を見つけて立寄り酒肴など誂へる、北八一時に尾籠
ながら、用たしに往つて来よう、雪隠は何處だ、
オ、あるぞく」と縁先より、むかうへ廻りて雪
陣の内へ這入ると、此内此方には酒肴出でたるに
彌次「マア一つ始めなせへ」案内佐平次「マア貴客
から」彌次「そんならお先き、オト、ア、い、酒
だぞ、コリヤ北八、早く出ねへか、早くく」と促
立てられ、北八雪陣のうちにて飲みたくて堪へら
れず北八「オ、合點だ今出るぞ」と周章へて戸を
明け、すつと出た所が、不思議なるかな酒屋の内

にてはなし、抑もく此雪陣は二軒前のものにて
此酒屋と裏に住む人の家と兩方にて使ふ雪陣なれ
ば、彼方にも此方にも兩口あるゆゑ、北八周章へ
這入りし方の戸を明けず向ふの戸を明け出たるゆ
ゑ、他の家なり、隠居らしき爺様一人、何やら小
細工してゐたりしが、北八を見て肝を潰し、目鏡
の上からじろく〜と見るに、北八もうろく〜と、
一向に合點行かず、まごつくうち、彼の隠居「モ
シ〜此方は誰ぢやいな」北八「ハイこれは違つた
さうな、モシ酒屋へはどうまゐります」



二軒前の雪陣 (其二)

南無三寶道が塞がった

隠居「ハ、ア讀めたわいの、此方は表の酒屋のお客ぢやな、其縁側を左に取つてすぐに行かんせ」
北八「ハイ、コリヤ行止りだ」隠居「其戸を明けて行かんせ」北八「ハ、ア又元の雪陣へ這入らにや行かれねへな」と雪陣の戸を明けんとすれば、内に、「エヘン、北八」南無三寶道が塞がった」と云ふを聞きて雪陣の内より彌次「北八か乙な方へ出てゐるの」北八「いや彌次さんだな、俺戸迷ひをして、飛んだ目に逢つた、早く此處を通してくんねへ」と戸を明けにかゝる、彌次郎内より懸金をかけ、彌次「イヤちつと待つてくれ、少し暇がいるア、退屈だは……」北八外から押せども明かす、内には悠々と彌次郎道成寺の唄、戀の手習つひ見ならひて、誰に見しよとて紅鐵漿つきよぞ、……

北八「氣の長へ何のこつたな、エ、コリヤ早く出
ねへかく」と言へども今度は内には何の音沙汰
もなきゆゑ、北八急き込みて、北八「どうだ、もう
出たか、エ、コリヤ彌次さんく」といふ内しば
らく、ム、ントンといふ音して、彌次「もうとつく
にい、が、待ちやれ、もう一くだり」北八「エ、馬
鹿な事を言ひなせへ」と言ひさま、無理に戸を強
く押せば、懸金外れて、北八雪陣のうちへ轉け込
むと、彌次郎も酒屋の方へ戸を明ける拍子に、倒
れる、其上へ北八ぐるめ雪陣の戸は破れる、彌次「
アイタ、、、」「亭主走り来りて」「コリヤ何ぢやい、
雪陣の戸がやくたいぢや」佐平次「アハ、、、、
、」



富 籤 (其一)

聽て天神橋を南へ打渡りて、横堀通を辿行くに、爰に人立騒がしく、喧嘩と見えて口々喚き罵りて打合ひく、往來いやが上に重り騒動するに、彌次郎北八も人に押されて、行抜けんとしたるが、何か紙に包みたる物足下に落ちてあるゆゑ、彌次郎何心なく開き見れば、八十八番と書きたる札なり、今は絶えて此事なしと雖も、此時分は座摩の宮に富のありし時節にて、往來の人々の群集に取落したるものと見えたり、遙かに此處を行過ぎて佐平次「モシ今貴客のお拾ひなされたのは、富の札ぢやないかいな」彌次「さうだらう、コレ八十八番とありやす」佐平「こりや座摩の宮の札ぢや、而も今日突く日ぢやわいな、大方もう突いてしまふたぢやろぞいな」彌次「さうさどうせ落す位のもんだものを、空つぼの札であらう、糸瓜にもならね

へ」と其儘捻り、打捨てるを北八跡よりちやつと拾ひて、懐中し行く程に、聽て座摩の社に至りけるが、今日は勸化富の當日、特に今突仕舞ひたると見えて群集下向夥しく、其中に人の話し乍ら行くを聞けば「ア、残念な事をした、彼の八十八番すでの事に俺が買ふ所ちや有つたわいの、あれ買損ふたは此方の運の來らんちや、買ふたら第一番で、金百兩取りをつたものを、けたいが悪い」と話し乍ら行くを、彌次郎聞付け、ぎよつとしてコレ北八聞いたか、今の札打棄らなんだらよかつた、エ、残念いことをした。



富 籤 (其二)

神前に至り見れば間違ひもなく當札の番附に一の
富八十八番と筆太に掲けあり、彌次郎餘りの事に
呆れはて、「エ、忌々しい、俺アもういつその事坊
主にでもなりてへ、とても連の開ける時節はねへ」
北八「ハ、ハ、そんなに力を落すめへ、俺が百兩
取るから、お前にも三兩や五兩は貸してやる、コ
レ見なせへ」と彼拾ひし札を出して見せる、彌次
「ヤア、手前拾つて来たか、出かしたく、此
方へよこせ」北八「いやさうはなるめへ、お前の棄
てたものを跡からちやつと拾つて来たから、こり
や俺に授かつたのだ」彌次「ハテさう言はずによこ
せ」と無理に引取らうとする、北八遣るまいと争
合ふを、佐平次止めて、「コレ、靜かに、其様
に言ふたらひよつと捨主が聞付けて、出まいもの
でもない、何ぢやあると、俺が挨拶ぢや、半分づ

「分けなされ、そして俺にもちとはおくれぢやあ
ろな」北八「ソリヤ俺が承知の助だ、何しろ善は急
げだ、金は何處で受取るのだらう」佐平「ソリヤ彼
處の世話人のをる處で渡しおりますわいな」北八
「そんなら其處へ行つて見やう」と打連れて、行
き見れば、

口 上

當日殊の外混雑仕候に付當り札の御方
明日四ツ時金子御渡申候以上

月 日

世 話 人

斯の如く下札してある故、扱は今日の事にはいか
ずとまづ神前にまゐりて、喜び勇み、處て彼處の
茶屋に這入り先前祝と酒酌交しぬ。



坤はこんく狐福

斯く思ひも寄らず百兩の富に當り、彌次郎北八、忽ち勢を得、座摩の社地を出でしより、養賣茶屋に前祝の酒酌交し、微酔機嫌となり心面白けに浮れ立ちて彌次「コウ北八ナント是から新町とやらへ女郎買にやらかしはどうだ」北八「すぐに行こうノウ佐平さん」佐平「ソリヤお出でなさるはえいが、無寝ながら其装ぢや、ちと身装味好してあすの夜さりなとお出でなされ」北八「それもさうだが明日の晩までは豪的に待ち遠な」佐平「さよなら斯様致そかいな、わしななんと、損料の著物借つて上げるさかい、夫著て今宵新町へ御出でなされ、お金は跡でも大事ない、どして明日は百兩お取りなさるのぢやものを、何ぢやあろとさうしなされ」北八「コリヤ面白へ、いかさま直ぐに歸つて、お前に其算段をして貰ひやせう」と有頂天になり、



早々長町の宿に歸り、佐平の算段にて、損料の著物を借り受け、着用なし、足も空に長町を北へ、境筋真直に行けば早くも順慶町、往來の側で、卜筮者の口から出次第「サアゝゝ御遠慮はない、お出でなされ、當卦本卦、黒色の考、濃いか淡いを當るが奇妙、サアゝゝこれへゝゝ」彌次郎北八此れを見て明日百兩とる事知れるか知れねへか慰みに見て貰はうと十六文出せば、卜者筮竹を取り、算木を並べ、暫く考へ、「卦は坤の卦、坤はこんくゝ俗に申す狐即ち狐福と申して、誠に降つて湧いたやうな、幸ひが來ると見えます」北八「コリヤ奇妙能く當りやした」

佐平次の目算

ト者「しかし變卦は乾の卦、乾な、けんけれけつ
の象り、本卦の坤と、變卦の乾と、合してこれを
考ふる時は易に曰、坤乾二つの間をぬけ、離の卦
に當つて中絶えたり、扱は玉なき殺鐵炮と申す事
ござれば、萬事に御心を附けらるゝが宜ござりま
す」北八「こいつはすこたん／＼そりや延喜のわり
い、もうよしなせへ、十六文たゞ捨てた」と小言
をいひながら、此所を打過ぎ行く程に早新町橋を
打渡りて、瓢箪町にぞ至りける、佐平「モシ／＼此
處が皆揚屋ぢやわいな」北八「成程ござへさうな家
臺骨だ」佐平「さあ／＼此處ぢや／＼」と二人を玄
關に待たせおいて佐平次一人住半の勝手口に入
り、かくと云入れる、亭主早速羽織袴にて迎ひに
來り、「コレはようお出下さりました、サアお通り
なされませ」彌次「そんなら免しなせへ」と玄關よ

りあがり、幾間も幾間も越えて行く程に、ぐつと奥座敷の華麗なる處に案内すると、佐平は態と二人を大盡風に持成し、遙末座に坐る、仲居共茶黄盆を持出でる内、佐平「斯致しましよ、夜前御著きなされてお草臥でもあろさかい、今宵は太夫さん方借つて御覽じて御酒一つあがつてお歸りが宜ござりましよ、ハテ又明日の夜さなりとお供致しましよかい」と爰にて佐平次ふと心付き、今宵金を遣はせた所が、ひよつと明日の百兩、どういふ事にて間違はぬことでもなしと、卜者が言葉思合せて安心ならねども今更此儘にも歸られず、一寸一杯飲せて速歸る目算ゆゑ、かくは言ふと見えたり。



損料の十文字

やがて太夫十人許、次ぎの間に詰掛けひかへるると、銚子盃を別に持出で、仲居「扇屋の折琴さん、これへおかし」と呼び出せば、折琴太夫座敷に出で、盃をとり、飲むまねして下に置き、仲居の顔を見てニツコリ笑ひ、立つて行く、仲居「榎屋の雛松さん、これへおかし」と此内段々と、太夫ひとり／＼に出で同じ事をする、彌次郎北八、是を珍らしき事に覺えて上機嫌の處、佐平「今宵は御見物のみのこつちやさかい、明日の夜さりなど、おゆるりとお遊びなさるがよござりませよ」と心に一物ある故、これぎりにしやうとする彌次郎目算違ひて不祥々々に「そんなら酒でも鱈腹やらかしやせう」と盃をとり上げれば、仲居共二三人立掛り彌次郎北八に羽織を脱がせ、た、み乍ら羽織の裏にしるしあるを見付けて、くつ／＼笑ひ出し、仲

居の、いさ「コレ見いな、十文字の糸縫があるわいな、大方損料の著物借つて、お出でたのぢやあろ」と仲居同士小さな聲にて囁き笑ふ、總て長町の損料にては、著物羽織とも、裏には白糸にて十文字のしるしを附置くと見えたり、とは知らず、彌次「ナント女中衆、此廊中に太夫は幾人程ある、皆總揚して遊んだら面白からう」北八「俺等が逗留の内、どうぞ皆へ揃ひの仕著でも残して往きてへもんだ、ノウ彌次さん」仲居「そりやお嬢しうおますわいな、ソノ著物の裏に十文字の印をつけてかいな」と袖引き合ひて笑へども二人は猶々一向に氣がつかず。



下に女の着物

北八「ナニ裏の十の字とは、何か當のあることだな、畜生奴が、ドレお盃戴きやせう」仲居「ホ、さよなら十の字のお方へ上げよわいな」北八「ナニ十の字とは俺が事か、コリヤ有難へ」と己が遊ばれることは知らず、盃を取上ぐると、仲居銚子を取つてつぐとき、誤つて其盃を膝の上にとり落し、其處ら中酒だらけに成る、仲居「こりやしまふた、貴客、じみくしてお悪かる、そして酒の掛つたのは、際付くものぢや、ちやと含水でなと洗うて上げうはいな、お脱ぎなませ」と立掛り、ぬがさうとする、北八は下に又損料の女の著物を著てるるゆゑ、脱ぎては恰好悪しと仲居を刎除け、北八「いや洗はずとよし、コリヤほんの不斷着だ」仲居「ハテ御遠慮はおまんせんわいな、お脱ぎなませ」と此仲居共二人、北八の著物こ

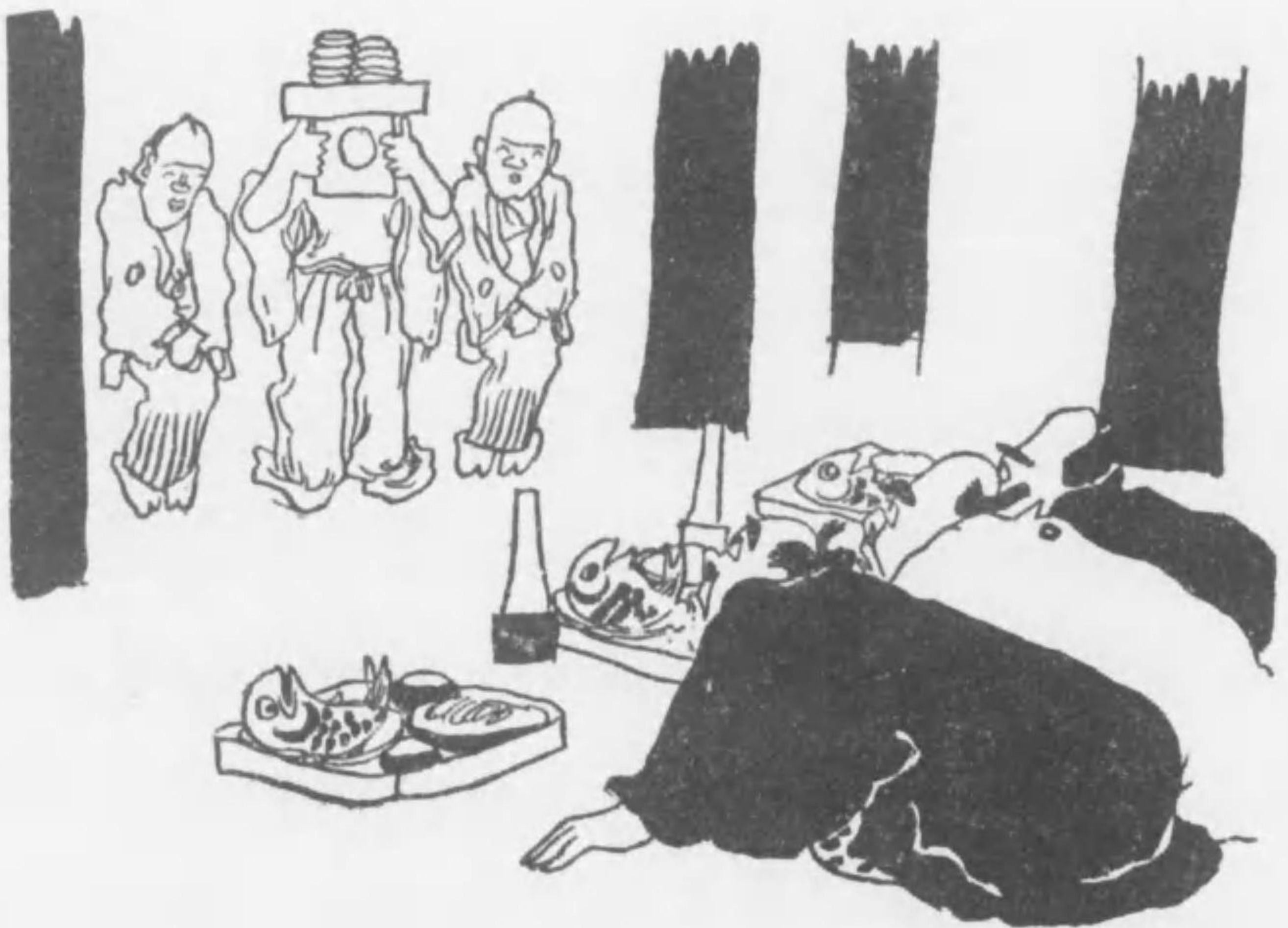
れも裏に十の字の印あるか見てやらんと思ひ、背
き合ふて、無理に二人して帯をほどきにかゝる北
八肝を潰し、「コレサ〜よいといふに」仲居共一
切構はずと〜帯を解き、無理に脱がせた處が
下には女の着物を著てるる、北八兩手を縮めて尻
込する、仲居共「ホ、ホ、十の字様〜」と無上
に笑へば、北八勃として、「コリヤ汝等は先刻にか
ら黙つてゐりやア、十の字だのなんのと、俺に符
牒をつけて慰み物にしやアがるが、何で俺が十の
字だ、それを叶せ〜」と酒機嫌諸共ねじけ出し
たが、その譯聞いて見れば又却つて兩人大凹みの
體なり。



當の大外れ

明日こそは彼の百兩にあたゝまり、今宵の恥辱を雪がんと、胸工みして宿に歸り、無事に臥したりけるが、夜の明るるや否や、佐平次、飛出して來て、早疾々と勸め立つるに二人は食事もそこそこ支度調へ、彼の座摩の宮なる、富會所に至りける。「モシお頼み申しやす、俺等ア昨日の一の富に當りやした、金子をお渡し下さりませ」と言ひ入れると、世話焼講中と見えたるが、一人羽織袴にて早速立出で、「コレハようこそ、マア此方の方へ御案内致しませう」と打連れてぐつと奥の二十疊許の座敷へ通す、講中「誠にはや、お目出たい事、御運の開けまする瑞相、貴客方に宵るやうにお盃頂きましよかいな」と酒肴の御馳走が出る、彌次郎北八、下地は好なり御意はよし、無上に差いつ押へつ呑んで居る内、世話焼講中代るく挨拶に

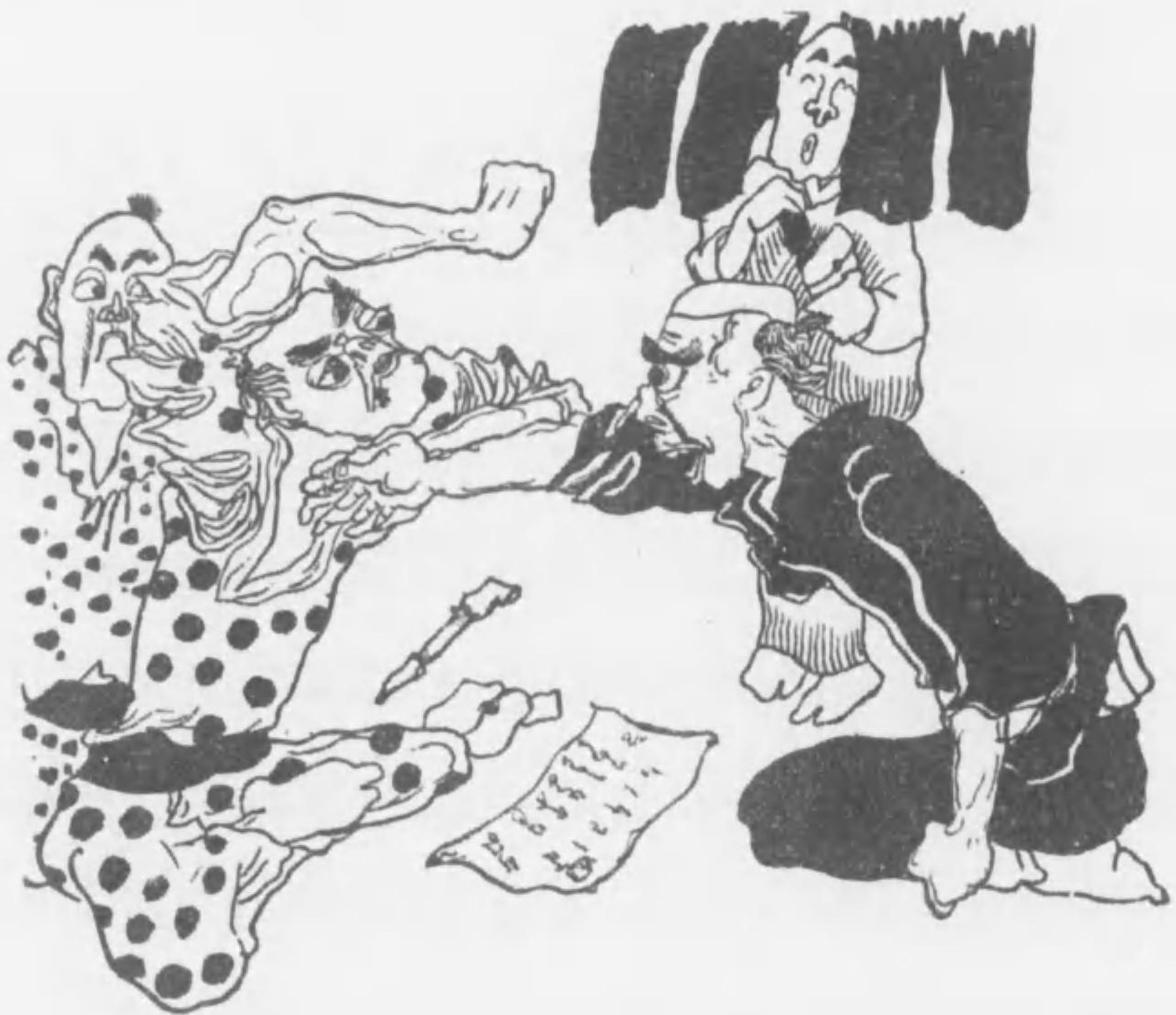
來り、追従たらん、最後に當社の神職と見えたる
が先きに立ち、講中二三人附添ひ、南鐙にて百兩
三寶に積み上げたるを、二分して目八分に持出で
三人の前に置く、彌次郎北八これを見るより、ぞく
くとして有頂天になり、控へると、神主「先は
お悦び申入れましよ、お芽出度いことで御座りま
す」彌次「ハイ〜」講中「金子お渡し申しましよ」
北八「ハイ〜」講中「左様なら其札をこれへ
お出しなされ、引換に金子お渡し申しましよ」と
云はれたので、北八件の札を出して渡せば講中手
に取り見て吃驚し「モシコリヤ違ふたわいな、數
は八十八番に違ひはないが、コレ見やんせ、十二
支が違ふてゐるわいな」



素寒貧の蘇生

一の富の目算違ひ、佐平次も俺が請合ひし損料の事も氣にかゝり、落膽せる兩人をやうくと河内屋に連歸り、「モシ早速乍ら、損料屋が勝手へ来ていざざります、もうお脱ぎなされて、お戻しなさるがよござりませよ」「北八」「アイ返してくんなせへサア彌次さんお前も脱ぎな」と二人ながら、不祥不祥に脱ぎて、元の古布子を著る、佐平次これを袖疊みとなして、「ハイ損料錢の書附でござりませ」と差出すを、北八取上げ、「何だめて一貫八百文、這奴高へく、ちと負けて貰つてくんなせへ」と遣つ、返しつ言ふ内、勝手より女來りて新町の書附を差置く、彌次郎取上げ、何だめて四十一匁四分、ヒヤア目が出るく、「北八」「こゝろ佐平さん、他國者だと思つて、餘り馬鹿にしなさんな、氣の知れた籠棒共だ」佐平「イヤお前方が籠棒じやわい

な、銭出してから何なと云はんせ、あたけたいな、てんご言はずと金出せやい」北八「いや此野郎は太へ奴だ」と立掛る、佐平も一筋ではいかぬ奴、互に負けず掴合にもならんかと思ふ所へ、此河内屋の亭主四郎兵衛馳け出で、佐平を吐り散し、委細のことを聞くに、二人も奥底なく委細を語り、身の素寒貧なることをも打明け頼みければ、亭主分曉男にてぐつと呑込み「よござります、ハテ萬兩分限でも旅では金に詰ることもあるもんぢやけにござります」と色々親切に言ひたる上、今日は俺も住吉へ行くさかい、お出でんかいな」と住吉の見物まで引受けくれたれば、兩人も蘇生した心持なり。



肥取の親仁

河内屋の亭主は舟にて行くとの事なれば、此方は天王寺を廻りて行かんと、又佐平次の案内にて宿を立出でけるが途中にて、佐平次「時に俺は、ちよと此裏に用事があるさかい、お前方は此通眞直に先へお出でなされ、ツイ此先きが天王寺じや、直に追付くさかい」彌次「よし／＼お先へめへりやせう」此處にて佐平次と別れ行くに、突當りて少しまがる所、何れへ行きたるがよきや知れざる故、先へ行く肥取の親仁を呼び掛け、彌次「モシ／＼天王寺へはどう参りやすね」肥取「俺が後へ附いてごんせ」北八「エ、追いて来いはあやまる、臭い／＼」と後へ下らうとすると、肥取振り返りて、「コレイノ俺天王寺のつひねきぢやさかい、連れまうて行こわいの、サア／＼ごんせ／＼お前方はど／＼ぢやいな」彌次「わしらあ江戸で御座りやす」北八「こ／＼彌

次さんもつと下つて行こう」と彌次郎が袖を引きて肥取の親仁を先へやらんと、わざと小便をする眞似などして彼の親仁を先きにやり、彌次「忌々しい親仁奴だ、餘計な事を話しかけやあがつて、氣の利かねへ」と言ひつ、も早餘程隔りしならんと、さつさと行く、向ふに又今の肥取の親仁待受けてる體に、北八「エ、惜ねへ、彼處に又待つてるやアがる」肥取「サアく、ごんせく」お前方又爰で道が知れにくかる、サアごんせく」といふに兩人又立どまりて小便するまねをする、肥取「マアお前方は、一日に幾度づ、小便してぢやぞいな、ハ、ハ、ハ、」



河太郎大盡

それより住吉街道に出でたるに貴賤老若打交りて
此神に歩を運ぶ、道すがらの賑引も切らず、爰に
大盡風の男末社數多連れたるが騒ぎ立ちて、團子
屋の門に立止り各々彼の團子一串宛求めて、横咬
へに洒落て出かける、この大盡名は河太郎、「コレ
婆様や俺は團子より、外に買うて往にたいもんが
あるが、賣らんせんか」婆「ハイ、何なと買うて
おくれなされ」河太郎「そしたら此門に立て、ある
障子一枚賣つて下んせ、是やろわいな」と前提の
胴亂より金一步出してやると、婆は肝を潰し、呆
れた顔してゐる内、河太郎自ら其障子を外しにか
、れば末社共驚き、「コレは旦那、斯様な破障子百
疋とは、ゑらたかの珠數じやわいな、しかし是に
は、何ぞ氣疎い御趣向でも御座りましよいな」河
太郎「わしや日向歩くと、逆上せて悪いさかい、コ

レ久助、この障子持てこんかい、コリヤ其方にも一分遣るは、其代住吉まで、ここの縦にして持つて歩け、オ、さうぢやく」と障子一枚を縦に持たせて其蔭を行くといふ洒落なり、此河太郎といふは、浪花名代のくわつぶつにて、かゝる洒落をなして樂とし、其名残りたり、彌次郎北八之を見てぎよつとし、彌次「イヤこいつはなか〜面白〜」北八「上方も馬鹿にやアされねへ、飛んだ洒落者がある、奇妙〜」と其跡に追いて行けば、大盡河太郎「障子も少し髣陶しうなつたわいな、久助もう其障子ほつてしまへ」彌次郎北八其捨てたのを拾つて、はかなくも洒落ながらやがて住吉新家に至る。



三文字屋

佐平「モシく、爰が三文字屋ぢや、チト御待ちなされ」と玄關より覗き見れば、奥に長町の河内屋はや此處に來り合せ、「コリヤ佐平殿早よごんしたの」彌次「俺等アやうく。たつた今参りやした、先づ参詣して参りやせう」と是より打連れ御社に至り社内を巡りて三文字屋に戻りたるに、河内屋「まあ一つあがりなされ」と盃を差す、北八「彌次さんお先へ」其時、河内屋「ホンにえい事があるわいな、どうぢや二人の内、一人は賣りつける口があるわいな」彌次郎「何のやうなことで御座りやすね」河内屋「男妾の口があるがどうじやいな」彌次「そりやほんにかへ、面白へく」と厚顔しくも俄に鼻をひこつかせ、嬉しがれば、北八もつと前の方へ出かけ、「モシ俺がやうなものでもよくばお世話なすつてくださりませ、最早兩人夢中なり

實は船場邊に工面のよき後家あり、年三十四五、
美しき代物にて役者買うて金つかつてならぬ故、
厄介のない男妾抱へたいといふ事、河内屋は今
の先刻、此茶屋に來合せし其番頭より、其男妾
の世話を頼まれしとなり、彌次郎北八はそれと聞
きて、一杯機嫌に無上に乗が來て頼むゆゑ、河内
屋は立つて奥の方へ行き、もう一度番頭にたしか
めやうとする、其内、彌次郎、北八お互に男妾
をあらそつて果しなければ佐平次中に入りて、「俺
が圖を出すさかい、長いのをとらんだのが、お
妾様ちや彌次、こりや長いのじや、しめたく」
有頂天になりて喜ぶ内……。



お 妾 様

河内屋四郎兵衛歸り來り、「サア出來たわいな番頭に掛け合つて來たが、甘い話じや、給金は望次第仕著は後家御から、年中やわらか物、何程なと拵へ次第彌次「ウヘー北八どんなものだい」河内屋「時に今其後家殿が、爰へ見える筈ぢやわいの」彌次「ナニ今爰へかへ、ソリヤ大變、ア、此扮装では：：モシ此邊に髮結床は御座んせぬか」と周章てるうち、後家「お許しなされやオホ、：、：」河内屋「さあ、もうちとねきへお寄りなされ」と言ひ乍ら持合せの盃を、後家に差せば、後家ニツコリ取上げ、少し受けて呑み、「此お盃、御返盃いたしましたよかいな」河内屋「イヤ俺も先刻から、えらう過ぎました、マア何方へなとお差しなされ」後家「さよなら貴方近頃憚様乍ら」と彌次郎に差す、彌次郎は始終夢中となり、此後家の顔ばかり、尻目にかけて、じろりくと見詰めるたりしが、盃をさ、れてぞつとするほど嬉しく、うろた

へ出し「ハイ／＼／＼戴きやせう」佐平「コレ／＼ソリヤ盃じやない、貰人ぢや彌次「ホイ是は取違へて籠相千萬、サア北八注いでくりや」とほくほく大喜びの最中、後家の召使の女來つて「モシ唯今、あら吉が見えまして、さつきにから彼方の座敷で、主婦のお出でなさるのを待つて、御座りますわいな」後家「あのあら吉が来てかいな」と俄かにそは／＼して挨拶もそこ／＼番頭引連れ立つて行つてしまふ、彌次郎呆氣に取られた顔して「こりや何の事だ」

(因にあら吉とは嵐吉三郎とて大阪一番の役者)かくて彌次郎北八は河内屋方にまた／＼逗留して所々残る方なく見物しける内にも、二人とも江都氣性の太腹中にて、かゝる雑遊の身を糸瓜とも思はず洒落通して少しもめけぬ様子に、河内屋の亭主大きに感心し、衣類など新しう著替へさせ、路用十分に持たせ大阪を出立させける。

漫畫東海道中膝栗毛 終



大正十一年四月十日印刷
大正十一年四月十五日發行

定價金壹圓五拾錢



著者 近藤浩一路

發行者 磯部辰次郎

印刷者 大澤京之助

印刷所 三賞舍

東京市芝區愛宕町二丁目十五番地

發行所

東京市日本橋區鐵砲町六番地
磯部甲陽堂

振替東京壹五〇五六番

終

